

2人の続き（完結編）

takashiishimoto

*

素の舞台に出てきた2人の男は野球のユニフォームを着て、左手にはグラブとキャッチャーミットをはめており、共にほんの少しお腹が出ている。2人の男を以下ピッチャーのPとキャッチャーのCと呼ぶ。Pは実際にはボールを持っていないが、パントマイムの要領で、右手のスナップを使って左手のグラブにボールを放り込む仕草を繰り返して、Cに顔を近づけ、ニヤニヤしながら小声で何やら話しかけると、Cはそれを聞いて大声で笑い出す。この時まで客電は付いたままだが、Cと、Cにつられたように笑い出したPの笑いが続いている間に、徐々に客電が落ちてくる。と、2人とも急にびっくりした声を出しながら、絡まりあうように同じ方向によけ、次の瞬間にはそろって客席の下手奥の方を見る。一拍置いてからPはその方角に向かって、「カンちゃん頼むよー。」と大声で叫ぶ。バッティング練習の球が大きくそれて飛んできたらしい。2人がしばらくその方向を見ていると、今度は素晴らしい当たりをレフト方面に飛ばしたのか、PとCの首がそろって大きな飛球線を追ってゆっくり動いた。

*

大学に入学すると、僕は山ほどある演劇サークルの中から、知名度や、新入生や先輩たちの人柄、既存の作品をやるのか、オリジナルなのか、シリアスな題材が多いのか、それともエンタテイメントにこだわっているのか、今はどんな人が台本を書いている、自分が書かせる可能性はあるのか、などを考えて探していたものの、最後はよく分からなくなって、なんとなく居心地がよさそうな、どこかボーっとしている人が多いサークルを選んだ。自分が行ったことがある舞台と言え、銀座のソニービルのライブホールでやったお笑いライブに高校の時に1回行っただけだが、浪人時代から何かモノを書きたいと漠然と考えていて、まずはコントの台本でも書いてみたらおもしろいかもしれないと思って演劇サークルに入ることにしたのだ。部員の実働メンバーは20名くらいで、そのうちの半数が役者をやり、残りの半数は音効、舞台美術、照明などを請け負う舞台制作会社との連絡や調整、またその実際の仕事をサポートをする。役者の足りない部分は、舞台のたびに他の劇団や知人などから集めてくる。

僕が入った時は、内山さんという3年の女の子の人が脚本を書き、演出もやっていた。他の演劇サークルにはよくいるらしい、いまだに出入りしている偉そうなOBはほとんどいなくて、内山さんの劇団と言えたかもしれないけれど、それは内山さんが、自分の作った作品を上演したいと思っているほとんど唯一の人だからだった。そのほかの人々は、男は普段は麻雀をしたり、テニス旅行の計画を練ったりしており、女はたまにラウンジの溜まり場を覗いて、内山さんの次の指示を待っていた。内山さんは色落ちしたブラックジーンズに野暮ったいジャケットを腕をまくって合わせたりしていて、よく男の先輩達と一緒に麻雀をしていた。サークルの溜まり場でも、カード麻雀をやっている、少し下がった目尻がロングヘアに付けた前髪から覗いていて、割合よく笑った。

僕が読んだ内山さんの作品はどれもハッピーエンドだったが、僕には、その他にもそれぞれ共通する部分があるように思えた。作品の舞台設定については、元禄の頃の横須賀の漁村、70年代半ばの難波のデパートの婦人服売場（当時、大阪出身の女の子の先輩が1人いて、内山さんはその人の大阪弁を使いたかったらしい。）、現在の多摩川園にあるテニスクラブの事務室などまちまちだが、僕が感じた共通点を乱暴にまとめると、まず、登場人物達は自分達に直接関わらない世の中の出来事に関して、ほとんど注意を払っていない。横須賀の漁師達は都市文化とは無縁だし、70年代の難波のデパートで働く女の子たちは、当時の雰囲気は本当はどうであったかは別と

して、テレビの話や、人の悪口や噂話を喋りながら元気に、そして無為に過ごしている。彼らの日常は、舞台となる場所と家との往復が生活のほとんどの部分を占めていることが描かれ、閉塞感と、そこに成り立っている均衡と均衡をもたらすための仕組みが示される。次に、そこへ外部から物語を展開させる人物が登場する。例えば、横須賀の漁村に、ぼろの古着や、葉草や、子供が遊ぶための笛などを売り歩いている行商人が、商売以外に、家の立て付けを手際よく直してあげたり、老人に整体を施したりして、だんだんと村人に馴染んでいき、村はずれに仮の宿りを作ってちょくちょくやって来るようになっていたり、東京から難波へ単身赴任でやってきた管理職にある男は、自分の持ち場となった婦人服売場で働く大阪の女の子達の勢いに最初は押されながらも、自分が身に付けている、色合いや作りが控えめなダークグレーのスーツに対比させるように、客には仕立屋にも負けない位の知識をもって、趣味の良い鮮やかな色使いで的確なコーディネートを見せることにより、徐々に売場に受け入れられるようになっていく。そのようにして、外部からやって来た人達もだんだんと「そこにいる人」になるのだが彼らには、それぞれのいわくがあるのだ。行商人のおじさんは、実は、ライバル業者に先駆けて、大規模な樽廻船の中継地を建設しようとしている大阪の廻船問屋から派遣された人物で、条件に適合する漁村を自分達に都合よく再開発すべく、村人には気付かれないよう内々に立地調査をしていたのであり、また、パートに単身赴任でやってきた男は、台東区にあった、小さい洋裁工場も裏手に持っていた洋品店の次男として生まれ、両親、兄とともに店も空襲で失った過去を持っていたが、エネルギーにあふれる大阪の女の子達に触発され（彼女たちも単身赴任の男の登場以降変わったのだが）、あと何年かで1980年代を迎えようとしている東京で、自分の手で洋品店を再建することを決意することになるのであった。こんな感じの話の幹にその他のエピソード、謎解きや推理が絡んで、会話のおもしろさで見せていく。ちなみに、多摩川園のテニスクラブの話は、こんな感じだ。最初、事務室兼控え室を舞台に、おばさん連中を教えている若手のテニスコーチ達が登場し、自分の生徒のことをネタに、悪口を言ったり、愚痴をこぼしたりしている。テニスコートはローテーションで使っているらしく、あるコーチが事務室へ戻ってくると、今まで休んでいたコーチのうちの誰かがまた教えに行き、新しい組合せでの会話がはじまる。その他に、素質のある学生を選びすぐって英才教育を施している老コーチとその助手、事務と受付のアルバイトをしている女子大生2人組、土地の有効活用のためにテニスコートとクラブを作ったオーナーとその息子、テニスを習っている妻の悪口をさんざ言われているところに迎えに来た有名演歌歌手などの登場人物が入り乱れ、閑静な住宅街の高級テニスクラブでは結構すごい人間模様が生まれていて、それがまた明日も続くことを暗示して終幕を迎える。ドロドロした人間関係をコメディで仕立て上げていて、僕が入学する前の年の秋にやったその舞台の台本は、僕はおもしろく感じたし、笑えて、どこかもの悲しいけど、勇気が出る、そんな話だった。僕が入ったサークルではそんな舞台を年に2回、いつも決まった神田の小ホールで公演した。観客は部員の友人や家族、その家族の友人、ほんのたまに顔を見せるサークルのOBなどほとんどが関係者だったけど、そんななかにも内山さんの創る舞台のファンと呼べそうな人は何人かはいらると思う。

ゴールデンウィークが明けると、時々サークルの溜まり場があるラウンジへ顔を出すようになった。校舎へのエントランスも兼ねるその1階のスペースは他のサークルも15団体ほど集まっています、煙草が煙る中だれた学生達がいつもたむろしていた。僕はそこへ行くとまず備え付けの自販機で紙コップのジュースを買い、誰かがどこからか持ってきてそこに置いた背もたれのないソファに座る。麻雀はやらないので、あとはたいてい先輩のやるカード麻雀を見ているか、誰かが置いていったマンガ雑誌か、写真ファイルを見ているか、昔やった舞台の台本を眺めているか、煙草を吸っていた。まわりの先輩達から聞かれたことに素直に答えて、愛想を言って、同期のやつが来ると授業の情報を交換した。たまに先輩のうちの誰かが音頭を取ってそこから飲みに行くこともあった。

そんな風に過ごしていた6月のある土曜日、ラウンジに残っていた4人のメンバーで、また駅前まで飲みに出ることになった。その4人の中には内山さんもいて、彼女と少人数で飲みに行くのはそれが初めてだった。煙草を吸いながら、カード麻雀をしているか、マンガを読んでいる内山さんは、話しかけられると、笑いながら答えているのだけれど、その笑みをたたえた眼差しにどんな感情を含んでいるのかなんとなく掴みどころがなく、少し人に距離をおかせるようなところがあった。内山さん以外にその日ラウンジに残っていたのは、幹事長の大森さんと、佐野さんという2年の女の先輩だった。

6月の爽やかな風が吹き抜ける大通りを4人で歩きながら駅前へ向かう。高校1年の夏休みにテニス部を辞めて以来、僕はクラスメイトとゲームセンターに行ったり、図書館の近くの喫茶店でアルバイトをしたり、女の子と付き合ったりしてブラブラと過ごしてきた。下校する時は、吹奏楽部が管楽器を鳴らす中、サッカー部や野球部、ラグビー部が練習をしている横を自転車に乗って、ある時は学校の仲間と、ある時は1人で下校した。3人のちょっと後ろにくっついて居酒屋に向けて歩いている気持ちのよい夕暮れ時は、その時僕が感じた少しもの寂しい気持ちを思い出させた。

幹事長の3年の大森さんは、ラウンジにいたことが部員の中で一番多いという理由から幹事長に選ばれた。遊びの計画を練り、自宅の4駆を使ってテニス合宿や舞台の打上げ旅行に先頭を切って繰り出す。裏方をやってくれる女の子がいなくならないのは大森さんの力によるところが大きいと思われる。大森さんは舞台がある時は役者をやる。佐野さんという僕と同じ文学部の2年の先輩はそういう裏方の女の子の1人と言えるかもしれない。ただ僕の知らない作家や詩人の名前をたくさん知っている。たまにラウンジを覗いて、自分のやるべき仕事もう動きはじめているかどうかを確認しに来る。

駅前の、サークルのコンパでよく使う居酒屋へたどりつくと僕達はテーブル席についた。僕の正面が大森さんで、隣が佐野さん、内山さんは斜向かいに座った。

「どう石本君、雰囲気慣れてきた？」

大森さんは、新入生がラウンジに顔を見せるといつもしている質問を僕にした。大森さんは、染めているのではない、単にドライヤー焼けした髪を真ん中から分けていて、紺のプリントティシャツを着ている。

「はい、暇な時よく来るんでだいぶ内山さんの台本読みましたよ。」僕が内山さんに話けると

、

「暇つぶしの学生演劇。」と、内山さんは煙草をくわえてニヤニヤ笑いながら、僕への皮肉とも冗談ともつかないことを言った。

「それで内山さんのファンになりました。」

僕もちょっとおどけながら本気とも愛想ともつかない風に答えた。

「内山さんはいつからモノを書いてるんですか？」

僕がそう聞いたところで、ビールではない発泡麦酒が2リットル瓶で運ばれてきたので、僕がその大瓶を持って、大森さん、内山さん、佐野さんの順に注いだ。大森さんが僕に注いでくれるコップを両手で持ちながら内山さんの横顔を覗いて、

「内山さんは大学に入る前からこの＜シャイアン＞って発泡酒知ってましたか？」

と聞いた後で、大森さんに「すみません。」と発泡酒を注いでくれたお礼を言った。大森さんが、僕の言葉を受けて、

「2本目からは普通のビールにしような。はい、じゃ石本君お疲れ様。」と僕への労いの言葉を乾杯の音頭に代えて、みんなで飲み始めた。僕は、下を向いて笑いながら、もう一度大森さんに「すみません。」と言った。あまり飲めないのも他の3人ほどは、ビールだろうが、発泡酒だろうがこだわりはないが、ただサークルのみんなが言うように、＜シャイアン＞は僕もまずいと思う。大森さんには、その時点でもう2回くらい飲み連れていってもらったことがあった。ラウンジにいる何人かを駅前に連れだし、大森さんはまず、僕か、僕以外の新入生にサークルに慣れたかどうか聞くか、そうでなければ下級生に調子はどうか、最近どうしてるかを簡単に聞く。大森さんが座談をひとしきり仕切るその間、僕は内山さんがグラスを見ている。まとめ慣れたホームパーティのホストのように、首を左右に振ってみんなが喋れるようにしていきながらも、話題の選び方は自然でたわいのないものだし、仕草もこなれたものだった。ビールが進むと、この前やった舞台の苦労話や馬鹿話を新入生や下級生を相手にして話し、乗ってくると、

「よし、じゃこれからレストランでの正しいクレームの入れ方を研究しよう。まず僕から。『もし、あなたが内気な人だったら。』』と言って、ごちゃごちゃ演じはじめる。芸のたつ役者の先輩が他にもその場にいれば大森さんの後が続くし、いなければ酔っ払いながらまた話題を他の人に振って、軽く女の子をからかってみたりする。いつもかなり酔うが、つぶれない。口数が少なかった新入生もだんだん話すようになるか、少なくとも笑っている。僕もそんな様子を煙草を吸いながら笑って見ている。自分からはあまり飲まないし、誰も強要しないのでたいてい素面だ。

「さっき石本君、ウッチに何か言いかけてなかったっけ？」大森さんがコップを置いて、チョリソーをつまみながら言った。

「内山さんはいつからモノを書いてるのかなと思って。」僕はそれまで、内山さんとそんなに話したことはなかったが、彼女から、「なんで？」と聞き返されることを予想したので、それよりも早く、

「いや、あの内山さんがいつから役者やってるのは確か聞いたことがあるんですけど、内山さんのことや佐野さんのこととかも聞いてみたかったし。」と言ったあとに大森さんの顔を見た。

「ウッチは最初からだよな、入ってから。」大森さんが代わりに答えて、内山さんの方に首を向けた。

「私書きたいんですけどいいですか、って言って入ってきたんだもの。」内山さんの手元に置かれた灰皿から煙草の煙が上がっている。内山さんの箸は揚げ出し豆腐を半分に千切っている。

「それで、最初からずっと書いてるよな。」と大森さんが言うと、

内山さんは、「だって、『ちょうどよかった。書いてる奴が行き詰まって、次はありものにしてよ、って話してたぐらいだから。』』って言われて、私が書いたやつが採用されちゃったんだから。」と答えた。

「それが劇を書いた最初ですか？」と僕は聞いてみた。

「高校の時に文芸部みたいのに入ってたのよ。部の名前は新聞部っていったけど。」

「どんなの書いてたんですか？」と矢継ぎ早に質問したところで、大森さんに、

「石本君てそんなに質問魔だっけ？」とまぜっかえされた。大森さんは佐野さんに〈シャイアン〉を注いであげながら、

「ウッチ、またファンが出来てよかったな。」と言った。内山さんと同じで、僕にとって、少人数できちんと話すのは初めての佐野さんも、

「私も内山さんの結構なファンですよ。」と言った。佐野さんは黒のパンツスーツに光沢のある深緑のシャツの襟を外に出して、4人の中で一番洒落た格好をしている。内山さんはベージュのコットンスカートによれた紺のジャケットを羽織り、僕は茶色地のチェックのシャツの裾をズボンの外に出していた。

ショートヘア、少しだけ細すぎるかもしれない切れ長の目と、きれいな鼻筋を持って、クールに見える佐野さんが、笑いながら、

「大森さんも、舞台以外の演技が特に好きです。」と喋ると、一座に親密な空気が流れるような気がした。

大森さんは、「君の役者デビューも近いよ。」と佐野さんに言った。

僕が火がついていた煙草を消して、ブロッコリーにマヨネーズを付けて頬張ろうとした時内山さんが口を開いた。

「最初のうちは自殺したり、殺したり、割と人が死ぬ脚本書いてたのよ。それが劇になるあてはなかったんだけど、新聞部の雑誌を読んだ、クラスが一緒だった男の子が『やろう。』って言ってくれて。それで、2年生の時にメンバーを募ってみたら結構やりたいって人がいて。最初から舞台の脚本を書いていた。だってセリフだけ考えればとりあえず話が進んでいくじゃない。」

「高校に入って最初に書いた話はね、ある女子高生のお母さんが自殺した後、内々に行ったその十三回忌という設定でね、舞台の上には大きい座卓が置かれて、その上に寿司桶や天麩羅の盛り合わせやビールが用意されているの。話の導入の部分は集まった、身内や、ごく少数の友人達が交わす時候の挨拶や近況報告で、その場には当時は女子高生だった女の子が今は主婦となってそこにいて、それで、彼らの現在の状況についての会話を踏まえる形で、みんなが当時を回想することになるの。その亡くなったお母さんは軽鬱病の既往歴はあったけど、当時は時折頭痛や倦怠感を訴えたりすることはあっても、ご近所とも割と楽しそうに付き合っているように見えたし、完全とは言えないにしても夫婦仲は悪い訳じゃなかったし、その女子高生は割と賢く育てていて、お母さんの性格には少し複雑なところがあったけども親子関係も悪くはなかった。舞台に人の出入りがあって、その場に自殺した女の娘夫婦が二人だけになった時、妻は夫に、『お母さんが自殺したのは私のせいでもあるのよ。』と言うの。この話題は二人の間ではたまに出る内容で、妻の出だしはいつも一緒に、夫の答え方や態度がその時々で違うの。「そうかもしれないけどしょうがない。」と答えたり、「人から伝えられるどんな言葉も、どんなそぶりでも、君には刺激が強すぎる時があるんだね。」と言うときもある。「家に帰ってくると、台所に電気がついて、テーブルの上にはコップとカプセルを出した後の銀の台紙のパッケージがあって、床にお母さんが泡を噴いて腫れ上がった紫の顔をして転がっていた。」こともそれまでに夫は何回か聞いていて、その話を聞いた後に、将来出来るかもしれない二人の子供の話は彼はするのよ。『もしお前が気を病んで死んだら、その子も君と同じことを言って自分を責めるんだろう。それでどんな回答も拒否してしまうんだろうね。』って言うのよ。」

内山さんは揚げ出し豆腐や、鶏の唐揚げや、ホワイトアスパラを食べ、発泡麦酒を飲みながら話

した。内山さんが話し出すと大森さんも冷やかさずに、飲んだり、煙草を吸ったりしながら静かに聞いていた。相槌を打ったり、先を促す役割は主に僕が担当した。

久しぶりに言葉を交わす人々のぎこちない会話。時候や健康についての挨拶、世の中のニュースや近況報告、最近の身近の問題と過去の問題についての考察、近くの中学校のグラウンドから聞こえてくる人々の声、様々な音、6月の生暖かい緩やかな風、今彼らが毎日感じている気持ち。食事や法事のちょっとした手伝う場面。親戚関係と友人関係、親子関係、それに夫婦の関係。生と死。明日ということ。墓園のはなれの建物から見える、日が射し込む予感がする、くすんだ色彩の中の芝生の緑。彼らの抱える現在進行形の事件。自殺する判断についてそれぞれの考察。内山さんの話は、主として登場人物たちのセリフの切れ端で語られていった。

「それで、テーブルの上を片付けている時に、自殺した女性の実のお母さんが、自分の孫である自殺した女性の娘に向かって、何気なく『お坊さんっていうのも真剣にやったらもたない仕事だね。』って言うと、孫娘は、『いい加減にやるか、本当に真剣にやるかよね。』って答えるの。ちょっと経ってから彼女は『おばあちゃん、私は真剣になれなかったら悲しい。だからなかなかもたないの。』って言うのよ。それで、おばあちゃんは片付け終わった後に、『疲れてたらお休みなさい。』って言うの。そこに孫娘の夫がひょっと寿司桶を取りに部屋に入って来るの。雰囲気を感じた夫は妻の、時に見せる深刻癖は知ってるので、わざとおどけた調子で、『いいんだよ。おばあさまがそう言ってくださってんだから。』って言うの。」

「それで、実は、その後のある場面でこの夫と夫の妹との会話で、自分の妻にも、特にこの時期は軽鬱病の傾向が見られることを告白することになるの。」

またひとしきり内山さんが話した後で、僕は、「その台本はまだ家にあるんですね。」

と聞いた。飲んでる時に話して貰うのではなくて、一人できちんと台本を読んでみたかった。内山さんが、うーんと考えて止まってしまったので、

「大森さんはこの話知ってましたか？」と今度は大森さんに聞いてみると、大森さんも初めて聞いた話らしくて、大森さんは「評判はどうだったの？」と内山さんに聞いた。

「まずね、今とあまり変わらないんだけど見てくれた人の絶対数が少なかったのよね。1日2回、2日間で4回やったんだけど、出演者の家族とか友達とかがほとんどというか、自分達の関係者が観客の全てで、1回につき10人は見てなかった気がする。けどおもしろかったよ、やる方は。」

「その話、おもしろそうですね。」と僕が言うと、

「実際やってみて、笑えるようなところとか、ほっとできるところとか結構ある？」と大森さんが聞いた。

「ハッピーエンドよ、いつものごとく。だって少なくとも主人公夫婦2人は一緒に家路に着くんですもん。」

「それ、いつかうちでやってもよくないかな。」とまた大森さんが聞くと、内山さんは、煙草を人差し指と中指の間に挟んで、煙を吐き出しながらニッコリして、「ネタがなくなって、書き直す気になったら。」と言った。

発泡麦酒が切れたところで、大森さんは、

「石本のリクエストかなえるよ。サッポロのラガー2本下さい。それから野菜スティックも。」と店のお兄さんに注文した。それから、静かだった佐野さんに、「佐野さん、聞いてた？どうだった？」と聞いた。

佐野さんは、「大森さんが静かに話を聞いているのって珍しいですよ、内山さん。」と内山さんに話しかけた。

その夜、大森さんはいつものごとく大いに飲んだが、ろれつは怪しいもののやはりつぶれなかった。内山さんと、佐野さんはマイペースでビールとサワーを飲んで楽しそうにしていた。僕は途中から、ウーロン茶と水を飲んでいた。内山さんが昔書いた劇の話がひとしきりつくと、「ウッチだったらあのドラマこれからどうする？」と大森さんが聞いたのをきっかけに、テレビでやってるドラマのストーリーをいじるゲームをした。フジテレビの恋愛ドラマは、主演のカップルが子沢山となったため大家族モノになり、日本テレビの女探偵はその後、予備校の事務職員、介護用ベッド他老人用の介護器具のセールスレディ、ホテルのクリーニングスタッフ、ステーキハウスでの鉄板焼係、ルポライターなどに扮して調査活動をするにすることで、それぞれの時の事件と犯人がどうだったらおもしろいかをみんなで考えた。その後は、大森さんが生まれて初めて役を演じた時の話、（高校1年の3月にやったサッカー部の3年生を送る会での、赤んぼを背負っている「子守りドリブラー」という役を演じた時の、出演約1分、受けは今ひとつだったという話）で、内山さんと僕は聞いたことがあるが、佐野さんは初めて聞く話だった。）佐野さんのアルバイト先である中学生のための進学塾の話（どんどん愚痴になった。）、内山さんの考えている次の劇の内容と（「新聞記者の話でジャーナリズムについて考えたいのよ、大袈裟に言えば。」と彼女は言っていた。）話題は転々と移りながら時間も9時を回った。大森さんがトイレに立った後、内山さんと佐野さんは最近文庫化されたマンガについて話していて、僕はそれを聞きながら、そんなに面白いなら僕も読んでみようと思った。タイトルの聞き覚えはあって、雑誌の紹介記事かなにかで話のつかかりも知っていたし、芸能人が誰かが好きなマンガに選んでいた記憶がある。大森さんは顔を洗ってきたらしく鼻の頭を赤くしながら戻ってきて、「そろそろ行こうか。」と皆に声をかけた時、女性2人の話題に気付いて、「あ、『アッシュ』全巻揃ったんだ、俺も買わなきゃ。」と言っていったん席に着いた。僕が、「それ、そんなにおもしろいんですか？」と聞いてみると、大森さんは、「1週間で全巻読むのは作者に失礼かもしれない。」と答え、内山さんは、「一週間はそればっかになるよ。小学生の時に読んだ『オズ』シリーズみたいに。」と言った。内山さん以外の2人は連載当時から読んでいたのではないらしく、作品のおもしろさを最近発見した興奮がまだ冷めていないようだった。

「魅力的で細かいところまで描き込まれたキャラクター、ページをめくらせていくアイデアのあるストーリー展開、作品の今日性、みたいなものですか。」と僕が聞くと、内山さんは、「もちろん全部あるし、」と言ったところで煙草の煙を吸い込んで、

「吉田秋生の他の『夢みる頃をすぎても』『河よりも長くゆるやかに』とかもおもしろいんだよ。」と言いながら煙を吐いた。それから吸殻でいっぱいになった銀の円盤型の灰皿に煙草を押しつけて立ち上がり、それがみんなが帰る合図となった。

大森さんと佐野さんは地下鉄に乗るために階段を降りていき、僕は渋谷まで、内山さんは池袋まで山手線に乗っていくためにホームへ階段を上っていった。

「あー、夜は涼しいわ。」僕の数倍はお酒が飲める内山さんは夜風にあたってそう言った。僕は、「試験が始まって、それが終わったら夏ですね。」と言った。土曜の夜の駅のホームはウィークデイに比べて学生もサラリーマンも少ないため、まだ10時前だが閑散としていた。ここのところ暑かったためTシャツか半袖のシャツ一枚という格好の人がほとんどで彼らも涼しそうにしており、いつも見られる質の悪い酔っ払いの姿は今はなかった。3分間隔で到着する山手線がくる間、内山さんは気持ちよさそうにポツと立って、「そうだ。」とひらめいて僕にガムをくれた。しばらく黙って僕と内山さんはガムを噛みながら電車が来るのを待っていたが、その

時僕は内山さんに、

「僕、幕間のコント書きたいんです。」とポツンと言った。内山さんは紺のジャケットのポケットに両手を突っ込んで、右足の踵で地面をコツコツ叩きながら、

「どうぞ、どうぞ。」と言ってちょっと笑った。「書けたら見せてね。」と言ってくれた。

語学のクラスメートで唯一家に遊びにいったことがあるのが高山だった。彼とは語学といくつかの講義以外にも、体育のウェイトリフティングが重なっており、キャンパスの西の奥手にある講堂での授業に、毎週火曜日一緒に出席している。体育の授業内容は希望種目を提出した後に抽選で決まる。夏期合宿、冬季合宿のみの出席で単位が取得できる水泳やスキー、その他にはテニス、卓球、軟式野球などが人気種目であり、抽選に洩れると定員まで満たない種目の中でまた希望を提出し、再び抽選を繰り返す。さらに予備として第3次抽選まで用意してあり数千人の学生を振り分けることになっている。僕と高山は1次でテニスを希望し、共に落ちた。高山は日に焼けて、頬と顎に浪人時代からの髭を生やし、不器用そうに、それでいて飄々とキーの高い声で周りのクラスメートと話す。本人は気にしてない風だが、喋り方のせい、年上であるせい、少し周囲とは違う雰囲気をもっていて、僕はそこが気に入りちょくちょく語学の教室で話すようになった。高山は2浪で僕は1浪だが僕は「高山」と呼び、他のクラスメイトは「おっさん」とか「先生」と呼んでいる。体育種目の1次抽選結果発表のすぐ後の語学で、みんなでその結果を報告しあっている時に、僕も高山もテニスを希望していて、共に落ちたということが分かった。

「どうせだったら一緒に授業受けるか。」と相談して、通常不人気なウェイトリフティングに2人して希望し、案の定通って2人でその授業に出席することになった。2人で出ているとさばらなくていいし、僕は大学で友達と呼べるやつを早く作りたかったのもある。

ゴールデンウィークが明けて1週間後の、3回目のウェイトリフティングの授業が終わった火曜日に、高山と昼飯を何にしようか考えながら、講堂から西の出口に向かってキャンパスを歩いていた。体育の先生は体育会のウェイトリフティング部の監督をやっている40代半ばくらいに見える人で、他にも、教育学部でなにかの講義を持っていると話していた。この人の授業は、教える-教えられるという関係がきちんと成り立っていて、経験に練られノウハウの伝達もスムーズなため、初めてウェイトを扱う僕のような出席者もだいたい面白さを感じているようで、この授業のおかげで高山とは徐々に仲良くなっていった気がする。高山の、「少し歩くけど、駅前まで出てピザ食わない？」というアイデアも運動を終えた後の快活な気分も手伝って自然に出てきたようだったし、僕も当然のように賛成した。

大学の最寄り駅は地下鉄は徒歩3分だが、山手線の駅までは速足で歩いても15分くらいかかる。よく知らない人や、気の合わない人と歩くのは苦痛な時間で、入学間もない、幾つかのサークルの新歓コンパに出てた頃は、中途半端で噛み合わない会話をしながら、この道を余裕無く歩いていた。大学を西の出口から大通りに出て後はまっすぐ駅までつながっており、駅に近付くにつれて商店が増え、ゲームセンターが現れるようになる。新品同様の教科書が置いてある古本屋、ディスカウントショップ、理髪店、コンビニ、ハンバーガーショップ、お好み焼き屋、焼鳥屋に居酒屋、花屋、スーパー、リュックサックを背負って、車道と歩道の両方を使い、停車中の車と人の間を縫ってインラインスケートですり抜けていく若者、裏地へ抜けていく高校生のカップル、夜は吐瀉物にまみれた学生が2、3人居酒屋の前で酔いつぶれ、定期的な時間をおいて仲間がその近所の喫茶店から出てきて様子を見に来る。例えば演劇サークルの人達と歩いている時、ふと意識が1人でいると、こんな景色に気付いた。

歩きながら大学での授業についての話をしていた時に、高山はふと、「昨日やっと買ったコンパが来たよ。まだ台所に電気つけてないんだけど、」と言ってから僕の顔を確認して、「石はジャズ聴くの？俺は聴いてるだけだけど。」と僕に聞いた。それまで高山と音楽の話をしたことはなかった。

「最近聴くのなくてさ、興味はあるけどちゃんと聴いたことない。」と僕は答えて高山の続きの言葉を待った。

ある時期音楽を聴くことが趣味のようになっていたことがある。僕の部屋には、今は小型のCDコンポが置いてあるが、僕が中学生の頃まではもっと大きいステレオセットがあった。その大きいステレオセットはもともとリビングに置いてあったもので買った当初はレコードプレイヤーも付いていた。僕が小学校に上がる頃までは母親はよく煙草を吸いながらテンプテーションズやアレサ・フランクリンを聴き、父親はドゥービーブラザーズやフーヤジョニ・ミッチェルなんかを聴いていたらしい。僕もテレビアニメのテーマソングや、母親が買ってきたマザー・グースが入っている英語の教材をそこでよく聴いた。母親はそのうち、煙草をやめた頃から音楽を聴くことが少なくなり、父親もその頃からリビングでは音楽を聴くことが少なくなった。僕が小学校4年生の時、友達から借りる歌謡曲のCDを自分の部屋で聴きたかったので、自分の部屋にもステレオコンポを置いてくれるように頼むと、母親はすぐ小型のCDコンポを買ってきてリビングに置き、父親がリビングにあったステレオをチューナー、アンプ、ステレオラック、スピーカーという風にバラして僕の部屋に持ってきた。父親は、「レコードプレイヤーはいいだろう、押入にとりあえず仕舞っとくよ。」と言いながら配線をつないでくれた。僕はステレオを置く場所にあったものをどかしたり、アンプの裏側を覗いたりしていた。配線が終わり、電源を入れてタイマーを現時刻に合わせると、父親は、「隆史の部屋にお宝が来たな。スピーカーなんかいいやつだぜ、大事に扱えよ。」と言って僕の頭を撫でた。僕と父親で友達から借りたユニコーンを聴いていると、母親が3人分の紅茶とロールケーキを僕の部屋に持ってきた。

僕が中学生になり、クラスメイトとの話題に、最近の洋楽や、テレビCMに使われているエリック・クラプトンや、洋画のテーマソングのことが出るようになると、家にある洋楽のCDは適当にピックアップして聴いてみた。500枚ぐらいあるその中で当時気に入ったものは、ポール・マッカートニー、ドゥービーブラザーズ、10cc、エルトン・ジョンなどだったが、学校では音楽の話は聞き役にまわった。少し度を越した悪ふざけや追いかけっこをする者、クラスの安定に役立っていることから先生も黙認していた携帯ゲーム機で遊ぶグループ、ロボットの絵を丹念に描いている男の子のまわりに2、3少年が群れ、窓際の隅では青年マンガを見ながら、どこで遊ぶにも金がかかってしょうがない、今日はどうするか、と他のクラスの仲間を交えて相談している5、6人の男女の集団、読書をする女の子、隣のクラスではサッカーボールが窓ガラスを割り、女の子のグループが階段の踊り場で目当ての男の子を呼び出す中、僕はクラスでも、大抵テニス部のやつらと一緒にいて、テレビの話か、ゲームの話か、女の子の話か、勉強の話か、自分の家の愚痴か、人の噂話か、テニス部の練習の不満を話していた。クラスの大勢はテレビで流行っている邦楽を聴き、休み時間はいつも誰かが歌を歌っているのが聞こえた。中には音楽好きもいて、兄の影響でストーンズが好きになったやつ、ピアノを習っているクラシックファン、僕よりずっと60、70年代の洋楽に詳しい者、バンドを組もうとしているグループもいたが、彼らと話をしていると疲れそうな気がしたのであまり近付かなかった。席が近くて仲良くなった女子と、将来、もし髪を染めるなら何色がいいか考えてる方が楽しかった。

休みの日でも仕事でほとんど家にはいない父親と、ごくたまにゴルフ練習場に車で行く途中は、FMラジオか、CDが流れていて、小学校6年生の時にその途中、近頃どうして家で音楽を聴かないのか、なんとなく気になっていたことを思い切って尋ねてみたことがある。「何か悪い感じがするじゃない。」父親は大人に理由を話すような口調でそれだけ言って、車に流れる音楽に耳を傾けていた。ジャズのピアノトリオが流れる中で、今の言葉は母親に対してなのか、それとも『リビングで音楽を聴くこと』一般についてなのか、テレビを見るのに邪魔になるからなのか、そうなったのはいつからだったか、窓ガラスに映る自分の顔の向こう側のキャベツ畑や中古車

屋を眺めながら考えていた。リビングのCDコンポがあまり使われなくなったのは、音楽への興味が薄れたのか、それとも夫婦の間の距離感が変わったからなのかと思ったこともあったけれど、今だって全然使わない訳ではない。この前も、父親はスティーリー・ダンが数年前に出したライブアルバムを、リビングでペリエを飲みながら機嫌良さそうに聴いていて、右手のソファに座った母親に、母親が普段乗っている車の調子について尋ねたり、学生時代からの共通の知人の噂話をしていた。部屋にこもって書き物をしていたのに区切りを付け、暗くしたままのキッチンでグラスに牛乳を注いでいるとそんな話が聞こえ、牛乳を持ってリビングを覗き、「今日はだいぶ早いね。」とパジャマを着た風呂上がりの父親に言うと、「たまには早く帰りたくなっただよ。隆史はご飯食べたの？」と父親は僕と母親に向かって尋ねた。

「高校の時好きになった女の子がお兄ちゃんの影響でマイルス・デイビスとかウエイン・ショーターとか聴いててね、話についていくためにその子からよくCD借りてたんだ。それまでは聴いたことなかったんだけど、これはいいものなんだからって思うようにしているうちに自分でも聴くようになった。」と高山が言った。

「それって音楽の聴きはじめの典型かもね。」僕は襷にかけた革製のバッグをかけ直しながらそう答えた。ティーシャツとジャージが入ってるのでいつもよりもだいぶ重い。

「そのうち気に入っているもの以外、嫌いと言うようになる。まわりの人を意識した趣味が出来るんだよな。その次の段階くらいからようやく自分の耳に新しい音楽が馴染んでくる気がする。俺は親父もお袋も何も聴かないからさ、友達の影響で聴きだしたわけ。だからいつもこんな手順を踏んでるんだよ。」

高山の言うことはなんとなく分かった。他の物事にも当てはまりそうだったと思った。

「僕は親父の影響かな、たぶん母親も、昔は親父の影響で聴きはじめたんじゃないかな。家にある親父のCDとレコードはだいたいひとつおりに聴いてみたし。」僕は言葉を切って少し考えてみた。新しいものを聴きはじめる前には、いつもちょっとした退屈があるような気がする。新しい友達、好きになった最近の作家、高山の場合のように好きになった女の子が新しい分野の音楽と一緒に持ってくる。

駅前の商店街に入り、通りに庇がかかった。小さいパチンコ屋の前に乱雑に置かれている自転車を避けながら、2人で並んで歩いていく。僕はモスグリーンのパロシャツの上に着たチャコールグレイのトレーナーの袖を捲ってから、両手をオフホワイトのコットンパンツのポケットに突っ込み、高山は肩から黒のナイロンバッグを提げ、前に両腕を組んでいる。信号を渡るために速く歩いたり、人を避けたりすると高山のバッグが前後に揺れ、すると思出したように左手を添え抱え直す。肩から提げているバンドが少し長いのだ。

高山は白のティーシャツにVネックの黒のセーターを重ね、まだ濃い色のブルージーンズを履いている。Vネックから見えているティーシャツの首まわりがバッグに付いているバンドのせいで少しよれている。さっきまで射していた陽が雲に入り翳った。2人とも汗はかいていない。

「高山はジャズ以外は何聴くの？」

「エアロスミスに飽きてるところ。テレビのCS放送から勝手に流れてくる邦楽かな、今は。後はなんとなくジャズを流してる。」

僕の家にもマイルス・デイビス、ギル・エバンス、ハービー・ハンコック、ウェザーリポート、といったCDはあったがあまり熱心に聴いたことはなかった。歌が入ってなかったからだろう。

「高山も最近聴くものが不足してるんだな。」と僕が言ったところで、商店街から横道に折れると50メートルほど先のビルの1階にピザ屋が見えた。

大通りから脇道へ入るといっぺんに静けさが増したような気がする。人通りもガクンと減るし、雑居ビルに挟まれているためにいつも陰になっている。この道をまっすぐ行くと山手線をくぐるトンネルがあり、そこを抜けると最寄り駅が代わる。昼時に客がある程度賑わうことを見越してか、5階建てのビルの1階に入っているピザ屋の店内は、まだ5月の半ばだと言うのに、ごく弱くではあるがクーラーをかけているようでひんやりとした。しかし時刻は12時半過ぎなのに中はガラんとした雰囲気、客は見栄えのしない女子大生の3人組と2人組、グレーのスーツを着たサラリーマン風の20代半ばぐらいの男、駅ビルの中のスポーツショップあたりで働いているように見える、ダンガリーシャツと長袖のゴルフ用のポロシャツを着た30代に見える2人組、僕達以外にはこの4組だけだったが、途中で店内装飾がおざなりになってしまったような印象のこの店には、これくらいガラんとしている方がふさわしいように感じた。窓際の4人席に座ると向かいの5、6階建てのビルと、その横の6台止められる砂利を敷いた駐車場が見える。駐車場には古い型の白い小型のセダンが置いてあり、ドアのところから後部に向かって車体を上下に仕切るバンパープロテクターの黒のラインが、その車をさらにみすばらしく見せている。

「この店どんどんすいてってるんじゃないかな。」高山は以前、語学のクラスメートと麻雀に行く途中来たことがあるらしいが、その時の印象とはだいぶ違うようだった。

「前は混んでた？」

「ゴールデンウィーク前に1度、2時前に来て、その時はぎりぎり座れるくらいだったんだよね。まあ、その時期くらいまではこの辺って落ちつかないんだろうね、毎年。」

赤を基調としたタータンチェックのシャツの制服を着た、髪を少しだけ脱色した女の子が注文を取りにやってきて、僕達はピザを2種類とサラダバーとアイスティとアイスコーヒーを頼んだ。

「・・・サラダはサラダバーの方でご自由にお取り下さい。」

2人で煙草を吸いながら、その子が注文を取り終わり向こうに行ってしまうのを待って、高山が「いいな。」と今の女の子の感想を言い、僕が「中では上品な脱色だな。」と世間一般の染色した髪と比較し、高山と共に、彼女の顔立ちは高い鼻が特徴づけていて、それが、少しだけ細い二重の目を上品に見せ、裏側から矯正中なのかもしれない、ほんの気持ち前に出た前歯のため閉じぎらないことを予想させる口元についても魅力的に感じさせている、と結論づけたところで煙草を吸い終わって、2人でサラダを取りに行った。

高山は埼玉の奥まったところに実家があり、大学入学を機に、新宿から私鉄で何駅か行ったあたりに1人暮らしをはじめた。実家から通っても学校まで1時間半くらいで着くのだが、仕送りを小遣い程度に抑えることを条件に両親から独立した。彼も一人っ子なので、子供を何人か抱えているサラリーマン家庭に比較すると、家計的な余裕はあるのだろう。僕も高校時代から恥ずかしくない格好が出来る洋服代と、友達と遊びに行ったり、デートをしたりといったお金は、基本的に言えば母親から貰えた。アルバイトもしたが、悪びれずに母親に頼むことも覚えてしまった。ただ高山は僕に較べると親からの小遣いはもっと抑えられているようで、今日のVネックセーターも古着っぽいし、食事をするにしても、喫茶店に行くにしても、教科書やCDを買うにしても、いつも頭の片隅で出費の合計と近いうちに入る収入の合計を計算して較べているようだった。だから高山は金に余裕がある時も態度で分かる。

「越してどのくらいになんの？」

「4月の2週目の土曜だからひと月くらいかな。後は台所の電気と本棚くらいかな、要るのは。CDコンポも来たし。」高山は小さく切りすぎたトマトと少ししなびたレタスをフォークで口に入れながら答えた。

「家のステレオは持ってこなかったんだ。」

「ちょくちょく家に帰るつもりだからね。それに家に置いてあるの、割とでかいんだよ、それで、昨日やっと来たんだ買ったやつが。CDプレイヤーとアンプとチューナーが1個の箱みたいになってるやつなんだけど音はまあまあいいよ。」

「他の荷物はみんな持ってきてんの？服とか本とかCDとか。」

「だいたい持ってきたよ。洗濯物たまったら帰るけど。」

高山は2年間お茶の水の予備校に通いながら、自由で気ままでもの寂しい1人暮らしのことを考えていたのかもしれない。コンビニエンスストアで買うまずい弁当や、スパゲッティを茹でて出来合いの pastaソースをかけて食べ、好きな音楽を聴き、本を読む。女の子を連れてきて一緒にテレビやビデオを見る。寂しい時は麻雀仲間を呼ぶ。私鉄に2駅乗って古着屋をまわって安く格好いいサングラスを買う。酔っ払ってアパートまでの道を友達と歩いたり、1人で歩いたりする。1人暮らしをするために、孤独に慣れておく必要があるのだろうか、それは慣れるものなのだろうか、と僕は思った。慣れるものならば、そこには自然と成立した決まり事や習慣があるのだろう。

「ゴールデンウィークはずっと実家？それともどっか行ってたの？」2人ともサラダを食べ終わり、空いた皿の上にフォークをのっけて、ピザと飲物が来るのを待っていた。フローリングの床は磨かれているのだが、壁の所々に、クリスマスの飾り付けに使うようなグリーンと金のモールと2つがひと組になった銀の鐘が取り付けられていて、その内装とテーブルとテーブルの間のゆったりとしたスペースが店内に貧相な印象を与えている。こんな感じでやるなら店員は制服じゃないほうがよさそうな気がする。

「基本的には実家にいたんだけど何日かアパートに通ったんだ。」高山が視線を空の皿から僕の右の肩口に上げたので振り返ると、ピザとアイスティとアイスコーヒーが来た。ピザは2種類が半円づつ切られて、ひとつの皿に盛られている。

「ハラペーニョソースありますか？」高山が唐突な感じにさっきの女の子に聞くと、その子は「はい？」と一瞬戸惑ったものの、すぐ思いあたった様子でとりあえず隣のテーブルに置いてあるものを持ってきた。

高山が礼を言って、「今日はすいてるんですね。」とまた聞くと、「今日は特にすいてるんです。」と答えて笑った。女の子が奥の方に引っ込むと高山が話を続けた。

「俺は浪人の時から1人暮らしを考えていて、ゴールデンウィークもアパートに行っているいろいろ考えてたんだ。買わなきゃいけないものは、カーテンと部屋の電気からはじめてほしい揃った。アパートの近所もだいたい分かったし、隣に住んでる大学生にも偶然会えた時に挨拶だけはした。ここまでが準備だ。」僕は、高山がいつもより流暢に話しているような気がした。左手に持ったフォークと右手を使って、ピザを自分の皿の方に取り分けながら、キーの高い声が心地よいスピードで次の言葉を追っている。

「石はどこに住んでるんだっけ？」高山は自分の皿の上で手に持って浮かせていたピザを頬張った。高山がまた視線を移したのに気付く、僕の後ろでさっきの店員の女の子が、隣のテーブルに新しく、赤のタバスコと緑のハラペーニョソースをひと組置いているのをちらっと振り向いて確認した。

僕が最寄りの私鉄の駅名を答えると、高山は大学に近いことをうらやましがった。

「けど1時間はゆうにかかるんだぜ、今の高山んちの方が全然近いじゃない。新宿で飲んで最悪タクシーで帰れるだろ。」

「そんな時は歩いて帰るけどな、俺は。」高山がまた裏手のキッチンの方に歩いていく女の子を

目で追った。

「まあまあいいよな。まあ俺、顔は見れりゃいいんだけど。」と僕が言うと、高山は、「やっぱり少しでも話してみないと分からないよな。ほら。」と言ってサラダバーの方を指で差した。サラダや海藻を入れた幾つかの大きなボウルを銀のステンレス製のラックのようなものに収めていて、その脇にドレッシングを入れたこれもステンレスの箱型の器が置いてある。テーブルには白いテーブルクロスが掛けられていて、ここから見えない向こう側にも同じ配置でボウルに入れられたサラダが置いてある。ドレッシングを入れたステンレス製の容器を挟むように、1辺にふたつ、大きいペン皿のようなトレイにサラダを掴むためのばね仕掛けのトングが置かれ、その一方のトングの奥にグリーンハラペーニョソースが置いてあった。

「さっき置いてみた。その場でサラダにかけるやつがいるかもね。」と高山が言った。

「高山、自分の住みかが出来てうれしいらしいな。」

「やっと住む所らしくなってきた気がする。」

高山にならって僕もピザを食べた。おなかが減っていたため、生地の歯ごたえの後にツナとエビとチーズの味が一気に口の中に広がり、それらが唾液で混ざったものをもぐもぐ嚙んだ。

「新居で料理したことあるの？」高山もピザを頬張っていたため5秒ほど続いた沈黙を、僕が口を動かしながら破った。頭の中で8：2で料理したことはない方に勝手に賭けた。「考えてたことのひとつだからな、あるよ。」と高山が答えた。「アスパラとブロッコリーを一緒に茹でて、豚肉をフライパンで生姜焼きにした。食えたよ。」なんとなく、高山のアパートにまだ友達に行ったことはないだろうと思ったので、それを聞くのはやめて、「今度行ってみたいな、高山のアパート。」と自分から言った。高山は見栄を張らずに、「来てくれたら石が初めてだよ、親も来たことないんだぜ。」と答えた。僕は、「親も住んでるとこ見たことないんだ。」と喋りながら、頭の中では、僕もここ1年半くらい友達の家に行っていないな、と思っていた。

その翌々日の2限は語学があり、15分前に教室に着くと、吉田が窓側に近い前の方の席にスポーツ新聞を広げて読んでいたので、通りすがりにそれぞれ離れて座っている女の子2人に適当に会釈をしたり、やあ、と声を掛けた後その隣に行った。吉田はいつも教室に来るのが早い。高松から上京して一人暮らしをしていて、早く教室に来るのは、「家にいてもしょうがないから。」と以前言っていたが、歩いて15分くらいで大学まで来れるので、電車で1時間強かけて通う僕よりも大学に親しみがあるのかもしれない。

吉田が顔を上げて、「石、よく来たな。」と言った。「来たよ。」と答え、吉田が広げている紙面を覗きながら、「読むほどのニュースある？」と聞いた。吉田は巨人が好きで毎日スポーツ新聞を読んでいる。熱狂的という程ではないにしても、勝敗とゲームの内容の復習はいつもして、初めて出会った頃は、プロ野球の結果を気にする人に久々に会った気がした。

「・・・球の伸びは少し落ちてるけど、カーブは良かった頃に戻ってきた。だからコンビネーション次第ではストレートで三振取れるようになってきたから、また桑田のピッチングが楽しくなってきた。」

吉田の話に隣で相槌を打ちながら、ぼんやりと教室の入口の方に目を遣って誰が入ってくるか見ていた。小倉が入ってきた。入口に一番近い列の後ろから2番目の長椅子に座る。白い長袖のTシャツにフィッシングベストのようなものを着ている。藤之原が煙草をくわえながら入ってきて小倉にちょっと右手を挙げて、廊下から2番目の長椅子の並びの最後列に座って煙草の灰を足元に落とした。高橋由紀子のグループが入ってくる。彼女達はこの頃教室に入る前に、隣の館につながる渡りの脇のちょっとした溜まりに5、6人集まってから中に入ってくるようになった。早く来た者は5人分並んだ青のプラスチックのベンチに座って、携帯で話をするか、雑誌を読むか、煙草を吸うか、辞書を引いている。彼女達と、高原たち付属校出身の男と一緒にいる時もある。彼ら都内の女子校出身者と付属校出身者にも、他の場所であった時に気まずいだけなのは嫌なので、視線が合った人には、僕は挨拶をして、授業についての話だけはするようにしている。この教室がある館の入口やら、建物をつなぐ渡りであった者同士が、話をしながら入ってきてどかどか席を埋めていく。土川がやって来て僕らの後ろの長椅子に座って、「どんな感じよ。」と吉田と僕に話しかけた。土川は付属校出身だが高原や本西とはタイプが違うので彼らとは一緒にいない。高校の時はあまり勉強することに興味がなかったと以前僕に言っていたが、今はいつも厚い本を持ち歩き、図書館にもよく通っていて、経済を研究するサークルと、海外からの留学生と一緒に英米文学を研究する国際部のサークルに入っている。土川は頭がいいので勉強しないことに飽きたのだと思う。古着のジーンズに物が良さそうな丸首の薄手の黒のセーターを着て、髪の毛のサイドをデップで撫でつけて、顔の横幅と同じ幅で、横にシェードを付けた銅色の眼鏡をかけている。この日の土川の印象はいつもよりも涼しげに見えた。

「英語の調子はどう？」

僕はこの前初めて、土川がラジオとTOEFL受験用のテープの教材を使って英語の勉強をしていることを聞いたのを覚えていて、尋ねてみた。

土川は、「勉強し直してるくらいだからセンスはないんだよな。」と聞く人によっては嫌みになりそうなことを言った。授業開始の時間と同時に高山が南部とやってきて、高山は、「ちょっとぱらぱら降りだしたぜ。」と喋りながら土川の隣に割り込んで、南部もそれに続いた。天気予報は見ないで家を出たが、他の誰も傘を持ってきていない。南部が整髪料でかき上げていた髪に落ちた雨粒を右手で払って前髪をわざと乱した。南部と高山や吉田、中村、今泉、楠木らはクラスの麻雀仲間で、授業の合間、合間でよく集まってやっている。僕は南部に話す話題を持っていないので、彼が来ると少し緊張する。南部は、「おっさん結構濡れたな。」と高山に話しかけて

いる。高山がそんなに嫌がらなかったのも、この頃から麻雀の席でついた「おっさん」が定着しだした。髭をたくわえ、年もひとつふたつ上の高山の呼び方を、みんなも高山自身も、無意識に探していたのだと思う。僕は長椅子を跨いで座って、南部に、「結構降ってるんだ。」と聞くと、南部は、「すぐ止やみそうは止みそうなんだけどな。」と濡れた髪が気になるという風に、額を少ししかめながら答えた。高山が「今日はここからでいいんだっけ。」と土川にテキストを出して聞き、教室の席が前の方を空け、後ろ3分の2を使って凹型に埋まり、女子のグループのうちのひとつから、ふたりが同時に「うそー、そうなんだ。」と声が上がって、その声がそろったことに仲間がけたけた笑い、高原たちが煙草を空缶の中に入れて消し、予習をやっていない者が辞書を繰っている時に、ノータックのグレイのズボンに紺のジャケットを合わせて、紺がベースの細めのレジメンタルタイを締めた、湯原先生が淡々とした様子で教室に入ってきた。教室の入口から教壇に上がるまでの時間や歩数まで決まっているように見える。疲れているのかマイペースなのか僕には分からないが、その両方とも当たっているのかもしれない。眉を覗かせた前髪を7、3で分けていて、その前髪を左手であたりながら、テキストのしおりのある所を右手だけで開いて、「では23ページの最初から。」とだけ言って授業を始めた。僕には教室にいない時の湯原先生が何を考えたり、何をしているのかが想像できない。学生とやりとりする時にずっと無表情な訳ではないし、別に怖い印象を与えているのでもないのだが、無駄話が全くないし、声のトーンも変わらないので、人柄を想像するのが難しいのだと思う。年齢はまだ40代だとは思う。そうして5回目の湯原先生の授業が始まると、30数名のざわめきは低く収まって、その終わりを待つこととなった。

湯原先生のその日の授業は見開きの2ページを3回めくり6ページ進んで終わった。終わりに、次の訳出部分の指定と、毎時間行われる小テストの内容について喋り、「では、来週にいたしましょう。」と言って、入って来た時よりも心持ち早足で、視線を3歩先に落としながら出て行った。湯原先生が教室を出ると、何人かの学生はすぐに、鞆やポケットから携帯を取り出し、留守電を聞くか、喋るかしており、何人かは何かを追われているかのようにすぐ教室を後にした。僕達はたいてい語学の授業が終わると教室の窓際で一仕切りガラガラと世間話をする。この窓際の集団は、講義に割とよく出ているということが話をするきっかけとなって、麻雀が出来るやつらは一緒にするようになったし、ビリヤードやバッティングセンターに行くこともたまにある。僕は、土川と吉田、高山、中村なんかとは、組合せはそれぞれだったが、夏休みまでに2、3回居酒屋で酒を飲むことになった。ビリヤードもやるにはやるが高校の時からそんなに好きではない。目を当てられないほど下手な訳ではないのだが、僕にとっては純粋な時間潰しで勝っても特にうれしくないのに、一緒にゲームをやる相手の割合熱心な姿勢が居心地を悪くさせるのだ。けれど昔から誘われると必ずやることにしている。その日は中村や楠木らはテニスサークルの都合やら、アルバイトの予定やらがあって、土川、吉田、高山、南部、足立と一緒に昼食をとることになった。授業を受けた1階の教室の窓を吉田が開けてみると、まだ雨がぽつぽつと降っていた。それで隣の館の地下の売店でビニール傘をそれぞれ買ってから、キャンパスから離れた講堂脇の庭園近くにあるカフェテラスまで、混まないうちに席を確保するため早足で歩いて行った。だいたいいつもギリギリで座れるが、座れない場合はその近所の定食屋に並ぶか、ちょっと駅の方に歩いてラーメン屋あたりに行く。カフェテラスはただで長い時間居れるのでいつもここからあたるのだ。

この日は急な雨が降って外に出ていた学生が慌てて入ってきたのか、もう結構混んでおり、僕達は早々と諦めて、「ここら辺はもう何処も混んでるよ。」と言う土川の言葉に従って駅の方ま

で歩いてみることにした。土川が、「ラーメン屋も混んでる気がするから、道沿いの、建物の2階にあるお好み焼き屋とか、喫茶店みたいのはどうかな。」言ったので、吉田が最初に自分で見つけたお好み焼き屋に、脇の階段からトントンと先頭に立って登っていった。入口に突っ込んだ顔を引き抜き、後ろに続いていた僕達に振り向いて、「空いてるって。」と言ったので、僕達はお揃いのビニール傘を格子の傘立てに入れて中に入った。

中には2人連れの女子大生がいて、じゅうじゅう音をたててお好み焼きを鉄板で焼いていた。思ったよりも狭く、煙がこもらないように天井には換気扇がまわっており、天井裏のダクトの中に吸い込んでいる。勢いよくまわるその換気扇の音を打ち消すように有線の音楽がやや大きめの音でかかっている、今まで何か話し込んでいた2人の女子大生は入口の鈴を鳴らして僕達が入っていくと、一瞬声を潜めた。店は、布地で出来た、何用のものか分からないグレーのキャップをかぶった脱サラしたような40代のおじさんと、大柄な色黒の東南アジア人の青年2人でやっている、おじさんは銀縁の眼鏡をかけ、ジーンズと白のコットンシャツに、洗い物をするためのダンガリー地のエプロンをしており、店員の青年は肌色のポロシャツにジーンズを履いている。吉田は入口の所で一瞬立ち止まり、辺りを見回して通りに面した窓際に2組のテーブルを見つけ、そちらに足を踏み出すのとほぼ同時に、店員が「こちらどうぞ。」と言いながら吉田が意図したテーブルと一緒に付いてきた。店内にはビートルズの「I Saw Her Standing There」が流れている。

吉田は表に背を向け窓際に端から端へ繋がった椅子に尻を滑らして奥に入って、手持ちのページのナイロンバッグを脇に置いた。吉田の前には僕が座り、僕の隣の席には高山が着いた。吉田の横に南部が入って、4人でしか一つのプレートを使えないために隣の卓に土川と足立が座る。土川は座りながら足立に、「しみじみやろうぜ。」と言った。僕達はそれぞれ豚肉とイカやタコが一緒になった「ミックス」やら、「キムチ豚玉」やら、「メンタイミックス」などをさっきの店員に頼み、煙草を吸う高山と僕と南部と土川は煙草に火を付けて注文したものが運ばれてくるのを待った。土川が上を見上げて、「天井がきれいだし混んでないから出来たばかりかもな。」と言った時、僕はこっちのテーブルは吉田が作って、あっちは土川がつくるんじゃないかな、と何となく考えながら曇った窓の外を眺めていた。煙草の煙は上に昇っていくので吉田はそんなに煙くないだろう、と思った。吉田がさっきの授業の来週の課題を蒸し返そうとした時に、キャップをかぶった店のマスターらしいおじさんがやって来て、「ちょっとすみません。」と言いながら、ポーッとしていた僕の脇に右手を突っ込んで火を付けて鉄板にサラダ油を敷いた。その後すぐに、大柄な店員が大きなステンレスのプレートに載せて、お好み焼きの具を6つのどんぶり状の陶器に入れて持ってきてテーブルに置く。「またメシ食わなきゃな。」頭がぼんやりしていた僕がそんな事を言うと、吉田は鉄板の上に手をかざして、「温まったらすぐ作ろう。」と返事をした。

この前、南部と足立と高山と中村がやった麻雀の話が出て、今度普段はあまりやらない土川が麻雀をやることになった。有線ではまだビートルズが流れている。「ビートルズは確かにいい曲をたくさん作ったと思うけど、世の中に適当な量よりちょっと多く流れていると思うし、みんなその分他の人の曲も聴くといいのにね。」とだいぶ昔に父親が言っていたのを思い出した。アルバイトの話も出た。吉田はコンビニのアルバイトをもう見つけていて、授業の合間もうまく利用して生活費を稼いでいる。吉田は家賃の他に仕送りを10万円送ってもらっている。食費や交通費などの生活するための必要経費とのバランスが分からないので、僕には多いのか少ないのかよく分からない。いずれにしても上限があるのだから生活に緊張感はあるだろう。高山は大学の掲示で2回交通量調査をやったと言った。「これからは俺もきしっと生活費を稼がないとな。」

と張合いを得たように高山は言った。南部はまだアルバイトをしたことがないらしい。南部は僕の出身校からもそんなに遠くない神奈川の有名私立高校出身で、一浪してうちの大学の文学部にいるということはおそらく、高い東大進学率と高校野球で知られているその高校では、あまり勉強はしなかったのだろう。大学の講義にほとんどサボらず出席しているのは高校の時に進級で苦労したからなのかもしれない。緩いパーマをかけて整髪料で持ち上げた前髪が雨と湿気で重くなったところを、さっきから時折両手で適当にほぐしているのが今日は所々跳ねている。僕と南部は今でもそれほど親しくはないが、この頃から南部は高山には気を許しているように見えた。

「来週はしんどいから俺も再来週から働こう。どっか行くだけでも金ってかかるもんな。」南部が高山にそう話しかけた時に、僕は、南部が高山に気を許すようになった麻雀の席での会話の中身をぼんやり想像していた。

「そういや南部ってサークルか何か入ってんの？」僕はたまには話をしておこうと思って、机と机の間に組んだ左足を覗かせ、煙草を吸いながら喋っている南部に話しかけてみた。南部は天井に向かってフーッと煙を吐き出した後、

「一応テニス、けど最近は練習にも行ってないな。」と言った。僕も店に入って2本目の煙草に火を付けた。吉田と足立は煙草を吸わない。浪人中に初めて吸った時は、なんていいものかと思ったし、どこかの国では子供の時から吸っているという理由が分かるような気がしたが、煙草を吸うのは今の時期だけで、いつかは止めるだろうと感じている。

「高山もテニスサークルじゃなかったっけ。」と僕は高山に聞いた。

「そうだったっけ。」高山はモップの毛先を短く揃えて、手のひら大に丸く収めたようなものを右手で鷲掴みにして、それをクルクルと円を描いて動かし、均等に油を敷こうとしている。「例えば石と俺とで、机出して一日中、中庭に座ってたとするでしょ。机には、何でもいいんだけど、翻訳サークルでも野球サークルでもそれこそテニスサークルでもいいんだけど貼り紙してさ、募集かける訳。例えば、『テニスはあまりしないテニスサークルです。』とか、『1次締切間近です。』とか書いてさ、寄ってきて合わないやつが来たら、『あー、そういうことはやろうと思ってないんです。』とか適当言って帰してさ、そんで4、5人まず集めて、日にち置いてそのメンバーがなんとなく固まってきたら、後はもうそのメンバーの友達とかでいいからさ、そうやって自分達でサークル作った方がまだましだと思ったんだよな、このひと月で。そんなめんどくさいことしないけどね。」

「高山ってサークルみたいのには入ってないんだっけ。」と僕はしつこくまた聞いてみた。高山は、「南部と同じでもう飽きたな、やりたかったら南部とやるわ。」と前に座った南部の顔を笑いながら見てそう言って、どんぶりを左手の親指と4指を引っ掛けて持ち上げ、「流すぞー。」と言いながらスーッときれいに生地を鉄板に落とした。土川がそれを見て「俺達もやろうぜ。」と足立に言って、どんぶりを持ち上げた。

鉄板は同時に2つのお好み焼きを作れる大きさで、高山と南部と土川が生地を焼いたり具を炒めたりした。外が曇っているので窓ガラスに店内の様子が映る。2人連れの女子大生は食後にコーヒーを飲んでいて、大柄な東南アジア人の店員は手持ちぶさたにステンレスの盆をいじり、店のマスターらしきおじさんは次の洗い物が来るのを待っているように見える。高山はお好み焼きを作りながら、引っ越し先の自分の部屋のことについて吉田からの質問に答えていた。

「駅からは近いの?」「速足で5分だな。その分そんなに広くないよ。」「どれくらい?」「18平米くらいだったけな。」「充分じゃない。そんなくらいの金なら俺んちよりいいかもな。俺今度見に行くよ。」「明日、石が来るよ。」

「俺コンビニのバイトがあるけど夜11時くらいから行っていいかな。それまで石いるの?」

雨を見ながら、ダクトが煙を吸いとった後も狭い店内にこもる鉄板の熱気を感じ、まだ有線で流れている「Hard Days Night」が眠気をさらに誘った。その曲を聴きながら中学生の時のクラスメイトのことが頭に浮かび『松山の兄ちゃんどうしてるかな。』と思った。

「俺は兄貴を尊敬しているんだ。兄貴の彼女もよく家に来るんだぜ。」松山はバンドでギターを弾いている大学生の兄のことをよく自慢していた。中学生の時にマディ・ウオーターズを知っていた。

「そんなにはいないかもしれない。」

たまに顔を覗かすちょっとした孤独癖のようなものを感じながら、僕は吉田に返事をした。頭の回転は鈍くなっていて、みんなの話に適当に相槌を打ちながら、お好み焼きを食べた。

その翌日の金曜日は、朝から雨がしょぼしょぼと降っていた。母親に出掛けに、今日は遅くなるかもしれない、と言うと、「私も茅ヶ崎の柳田さんのところに行くから、夕御飯は作っとくね。」と台所で洗い物をしながら僕に返事が返ってきた。母親は車に乗ってたまに、茅ヶ崎の、女子高時代からの友達の家に行く。「もう梅雨なんだっけ。」と母親に聞くと、「梅雨の時期って後から決めるもんでしょ。だいたいまだ早いんじゃない。」と言われ、玄関を出た。

8階のエレベーターホールまで来ると脇にある窓から辺りの様子が見渡せる。ベランダから林と林の間に20センチくらいの長さに見える東海道新幹線の高架がここからも見え、近くには、同じような屋根が並んだ住宅地が広がっており、少し先には僕が通った公立の中学校の校舎と校庭が半分だけ見える。このマンションは住宅地の外れからスロープで上がった、ちょっと高台になっている所に3棟だけ建っていて、まわりに高い建物がないため見通しがいい。すぐ足下には2階建ての立体駐車場が見える。この窓の反対側には建物の前に小綺麗なアプローチが付いていて、エレベーターを降りそこへ出てみると、痛そうな枝葉に所々落ちそうな花を付けているツツジの植え込みにぐっしょりと雨の滴が垂れ、アスファルトは黒く湿っている。霧雨の中、住宅地を通り、10数軒のこじんまりとした駅前の商店街を抜け、駅へ10分程かけて歩く間に今日の予定を考える。

<そーいや夕飯いらなかったかもな。2限に出るだろ、今村先生のテキストは、語り口が明快だから分かるような気がするけど、参考文献があまりに多すぎて何から読めばいいのか分からない。今に近い順に読んでこうかな。やっぱりフーコーあたりかな、仮に読むとして。今日図書館行ってみようか。本西と水野は分かってんのだろうか？いずれにしてもテキスト読んでこないと来る意味ないと思うけどな。それ出てラウンジ行って叶岡か上平でも探して、いたら昼飯食ってから、図書館行こう。中村、楠木は今日『経済学』出んのか？酒をどこで買うかだな、後は。>

最寄り駅に着くと私鉄で渋谷に向かい、そこで山手線に乗り換える。山手線の駅からは行きはだいたいバスに乗ってキャンパスへ行く。JRの出口からバス停が近いのだ。帰りは、文学部のキャンパスからだ地下鉄の出入口がすぐなので、特に人と一緒にいるとなんとなく地下鉄に乗ることが多い気がする。電車の中は傘を持った人達でいつもより混んでいる感じがして、下を向くとオフホワイトのジーンズの裾の方に少し泥が跳ねていた。バスを降りて文学部のキャンパスに着くと雨足はやや強くなっており、講堂の入口からは体育のトランポリンの授業をやっているのが見えて、学園祭の時はステージが出来る講堂前の広場を横手に、木々に囲まれたなだらかな坂を1時間ぶりに煙草を吸いながら登って行くと校舎に着いた。家からここまで、雨の日はいつもより10分くらい余計に時間がかかる。現代社会思想の講義を行う100人程度収容可能な教室には、よく顔を見かける者15人くらいが先に席に着いていて、その中には国際部の留学生も4人いた。イギリスから来たロバートというらしい白人とその恋人の中国人の女性、その後ろに30代のサウジアラビアから来た前髪から薄くなってきている背の高い男性と、背の低い白のトレーナーを着たアジア系の男性、この4人が正面の1列目と2列目に座っている。

始業時間を5分過ぎても本西も水野も姿を見せない。出欠を取らないし、基本的には、授業はテキストを読んで喋るだけだし、内容もよく分からないので、テスト前にテキストを読み直せばなんとかなると思ったのかもしれない。今村先生は自分のテキストの内容に沿ってぐいぐい講義を進めていくが、時々内容が本旨から脱線していくことがあり、そういう時はたいていその最後にどこかの研究者の悪口を言った。けれど今村先生のテキストの中や思想誌の中で、講義中に悪口を言った研究者や学者について触れていたり、彼らと対談をしたりしているので、先生にとってみれば、それは悪口というより、彼らに対する単なる自分の意見の表明なのかもしれない。

今村先生がいつものように重そうな黒の革製のショルダーバッグを肩から提げて入ってきて、

教壇に登り、机の上に本がたくさん入ったそのバッグをどすんと置いてテキストを取り出し、いきなり「この前は、・・・」と始めた。他大学に本籍を置く今村先生は週に2度この大学にやって来て、経済学部と文学部で講義を持っている。サイドの白髪が短めに刈り込まれ、下がり気味の眉の下に、厚い四角の銀縁の眼鏡を掛け、その奥から覗いている目は小さく、目の前のものではない何か他の物を見ているようにも感じられた。僕は窓際の前から4番目の席に1人で座り先生の話聞いた。今村先生は労働をテーマに講義を行っている。(一面的に、なのだと思う。)僕は浪人時代に図書館で勉強に飽きると、大学入学前独特の知識欲のようなものにほだされ、いつか熟読するフーコーやドゥルーズ=ガタリや浅田彰の本を数ページめくってみたりしていたが、哲学書なり思想書に真剣に取り組んでみたことはまだない。浪人の時はこれから読むべき本の数に呆然となったが、『言葉と物』も読まずに死ぬのは嫌だと思った。けれどその時買った『言葉と物』を今もほとんど読んでいない。

今村先生の話がテキストから横道にそれ、だいた難しくなってきたので僕は自分でテキストを読み返した。具体的事例が指し示す必然から自分の考える論旨に導き、読者の持つ感想や反駁は厳密に想定されており何らかの対処が講じられている。その態度はかえって最初のひらめきを、熱意を持って追っている印象を与え、それらは世間一般の学生にも分かるように平易に書かれている。テストのことを考えると、表面上は内容が理解できることに僕は安心したが、その深い所にある意味、参考文献に対する知識とその理解、著者が選んだ著述態度についての捉え方などは充分把握しているとは思えず、ただ「割とおもしろいから読める。」と思ったにすぎなかった。今村先生は本論からすると注釈にすぎないような所から入って議論を広げ、かなり長い時間を淡々と僕達がついていけない内容を喋っている。それを聞いていると、テキストに書かれている言葉なり内容はどのように選ばれたのか興味を持った。

今村先生の話についていけなくなって、テキストをめくるのにも飽きてからは、ロバートと中国人のカップルをなんとなく眺めたり、ノートにメモした参考文献を確認しながら、読むかどうか分からない読書計画を練ったりしている間に講義が終わった。やはり本西も水野も姿を見せず、彼らと話す必要がなかったことに少しほっとした。ロバートとその恋人は国際部の2人の友人に挨拶をして先に教室を出ていった。僕は教室の席に座り、テキストをまだ読んでいる振りをしてしながら煙草に火をつけ、息をついてこれから何処へ行こうか考えた。

<やっぱりラウンジ行って、叶岡がいなかったら、『叶岡来てませんか。』って聞いてどっか行っちゃおう。>そう思って、文学部のキャンパスから通りを渡って、本部キャンパスの西門に入ってすぐの建物の1階にある、演劇サークルのラウンジに行くことにした。教室からロビーを抜けて外に出ると、雨音はほとんど消え霧雨になっていた。

入学してからその場所に行くのは5回目になるがまだ慣れてはいなかった。案の定叶岡はなくて、大森さんと、大森さんと同学年で3年の戸野さんという役者の先輩がいて、2人で講義内容についての情報交換をしていた。僕が大森さんに向かって用意をしていたセリフを使おうとした時、大森さんが、「おお石本君だね、飯食った？丼物かスパゲッティ食いに行かない？」と誘ってくれた。僕は「はい。」と答え、僕の今の表情はどういう風に見えるのだろうかと思いながら照れ笑いをした。戸野さんは「カツスパにしようぜ。」と大森さんの方を向いて言った。昼食の間は聞かれたことにはきちんと答えて、答えたあとには質問しようと思った。大森さんはすぐに腰を上げ、「混む前に急ごう。」と言って、黒のナイロンバッグを左肩に背負いながら、「雨はどんな感じ？」と僕に尋ねた。

高山の説明通りにいくつかの目印に沿って5分歩くとアパートには迷うことなく着いた。すぐ裏手には小さなレストランやバーが数軒並ぶ通りがあるのだが辺りはひっそりとしていて、駅前と住宅地を分ける境目の通りの駅側に面した高山のアパートからは、街灯と、それぞれの家々からカーテン越しに洩れるぼんやりとした明かりの他には、「クリーニング松川」と書かれ、中から照明に照らされたほんの小さい看板しか目につかず、同じアパートに住む住人達がたてる物音や声も、アパートの造りのせい、まだ帰ってきていないのか、僕が窓を開け、辺りを見回している間も聞こえず、外は心持ちひんやりと感じた。夜空を見上げると星が見える。4限の経済学の講義が終わった時には雨は上がり、通り沿いの酒屋でワインかウィスキーを買おうと思って、大学から最寄りのJRの駅まで歩く間、そんな天気の変化か、やけに夕焼けがきれいに見えた。

部屋の中は台所から部屋まで間仕切りはなくフローリングで、木製の大きめの勉強机が28型の横長テレビの対角にあり、その机の上には小型のCDコンポが置かれている。あとはベッドの代わりにマットレスを置いただけの寝床、本棚とそこに入りきらない本が入れたままになっているダンボール、本棚の横の、直径1センチくらいの鉄の棒で外側のフレームを作っている大きめのCDラック、台所近くの低いタンスの上には積み重ねられたCDと文芸誌、スポーツ誌などの雑誌が置いてある。部屋の隅には小さな備え付けのクローゼットに入りきらない洋服が、枝を元から切った背の低い木のようなコート掛けと、むき出しのステンレスの棒が横に突っ張っただけのハンガー掛けに適当にぶら下がっている。

高山は僕が7時頃に部屋に着くと、玄関に立って「そのまま買い物に行こう。」と言った。吉田から10時頃にはアルバイト先から来れると電話があったので、外で食事をしてからまた家に戻ってくるより、家で何か料理を作って食べながら待っている方が落ち着くだろうというのだ。高山は、僕が買って来た赤ワインを流し台の上に置き、ペリエを冷蔵庫に仕舞い、玄関の脇に僕の傘を置かせた。それから「スリッパも買わなきゃいけないし。」と言いながら自分のスポーツシューズを履いて、さっさと部屋の鍵を締め、先に立って鉄製の階段をカンカン鳴らしながら降りた。階段の下で僕を待ち受けてから、ちらっと僕の方を向いて、「駅前のスーパーで何か買おうぜ。」と言った。僕は、「万全の体勢で待ち受けてたな。」と少し笑いながら答えた。

僕達はスリッパをまず第一に買うことにした。高山は引越した当初、なかなか気に入った柄のものが見付からず3日間スリッパなしで過ごしたらしい。「その時に部屋を快適なものにするためには、まずスリッパが必要なことが分かった。」と高山は言った。駅前の3階建てのスーパーの3階で、高山はさして迷うことなく青と白のチェックのやつと、細かい、カラフルなドット状の模様の描かれたグリーンっぽいものを選び、レジでは、「スリッパ代出してもらったら石、それ家に持って帰らなきゃいけないよ。」と言って高山が払った。高山は自分でスリッパが2足入った紙袋を持ち、僕は講義で使った教科書の入ったカバンをいつものように襷にかけ、ポケットに手を突っ込んでエスカレーターを1階で降りて、これから何をやるか協議を始めた。

「このひと月のつたない経験でいうとだな、煮るのはだめだな、とにかく焼くこと、迷ったら焼く、これなら間違いない。」と高山が言うので、まず、野菜炒め用に、玉葱、ピーマン、モヤシ、人参、チューブ入りの生姜、フライパンで焼く焼肉用に、牛肉のカルビと、鳥肉のささみ、これもチューブに入ったワサビと、擦りおろしたものを瓶に詰めたニンニクを僕が持つプラスチックの籠に入れた。

「1人だったらこれで終わりなんだけど、もうちょっとなんとかしようか。」と高山が言ったので、さらに食品売場をうろうろして、まず、豆腐とハンペンを買った。高山が隣で「焼けるものか、生のものかどちらか」にだいぶこだわったため、まずこの二つが籠の中に入れられることになった。出来合いのサーモンのマリネや、鰯のエスカベッシュがソーセージの隣でガラスケー

スに入って売っていたが、また、「せっかくだから、焼けるものを買おうぜ。」と高山が言ったので、笑いながらそこをやり過ごし、フロアをぐるぐる2周して、結局焼きそば用の麺も買った。このままでいくと、単なる焼きそばに集約されそうだった。高山と僕はほぼ同時にそれに気付いて、高山が、「そうなんだよ、突き詰めると焼きそばなんだよ。」と言ったところで僕達は爆笑した。2人の笑いが長い間続いた後で、「吉田が来たら、もう全部焼きそばにしよう。」と僕が言った。

結局買ったものは、野菜炒め用の野菜、焼肉用の肉、豆腐、ハンペン、焼きそば用の麺、僕が買って来た赤ワインに合わせてナチュラルチーズを2種類、高山がうまそうだ、と言った椎茸とエノキダケ、氷、それからペリエを3本追加した。後は何かあったらコンビニで買うことにして、スーパーを出ようとしたところで、僕は「コルク抜きって家にあんの？」と高山に聞いた。

「引越しすることを決めて、不動産屋に初めて行った帰りに、コンビニで栓抜きと缶切りは買ったよ。その栓抜きに付いてる。」と高山は答えた。その栓抜きと缶切りは、1カ月くらい高山の実家で、自分の部屋の机の上に置いてあったらしい。それから、「けどワイングラスはないぞ。」と言った。

高山が台所で野菜を炒めている間、僕は窓から外を覗いた後、部屋をもう一度しげしげと眺めながら、高山に、「ちょっと路地に入っただけでだいぶ駅前と雰囲気変わるんだな。」と話しかけてみた。高山は「この部屋当たりだろ。」と自慢した。それから「野菜炒めが出来ない人間は野菜炒めを作ろうとしない人間だけだな。」と言った。僕は笑いながら、「洗いもんは出てる？」と窓際から聞くと、「なんか好きなものかけてくれよ。」と言われたので、僕はCDプレイヤーに載っているものをそのままかけた。ジミ・ヘンドリクスエンジェルのギル・エバンス・オーケストラの演奏で始まって、僕は、「これ家にあるぜ。」と言うと、「前に、そんなこと言ってたっけな。」と高山は答えた。僕は高山の声が聞こえるようにボリュームを適当に抑えたが、それでも、音楽ひとつで部屋が特別な空間になったような気がした。部屋の本棚には時々の流行りのエッセイや小説などの段とは別に、僕が名前を知っている著者は落合信彦、フレデリック・フォーサイス、堺屋太一くらいだが、国際政治ものや、サラリーマンが読むような経済関係の厚いハードカバーの本がずらっと並んでいる段があって目を引いた。ダンボールの中の文庫本も日本の割と最近の作家のものが多いようで、積み重ねられた上の方は椎名誠の本が占めていて、脇に清水義範の本が覗いていた。マンガはないようだった。本棚にはCDも置かれていて、ジャンルは整理されていない。いろいろあったがそこにはクラシックが多かった。それ以外のCDは机の上と低いタンスの上にそれぞれ10枚位づつ出されていて、残りは全て収納スペースが3列ある、高さ70センチくらいの、500枚は入りそうなCDラックの中に入れてある。

「高山、本読んでんな。」と窓から陰になっているキッチンスペースで野菜を炒めている高山に話しかけた。「政治ものとか経済ものとか世界情勢のこととか落合信彦とか好きなの？」と聞いてみると、「ああ、ちょっと落合信彦2ページ読んでみ。」と大きな声で言われた。座っていた落下防止のために取り付けられている鉄柵と窓を開けたサッシの間から腰を上げ、本棚から適当に1冊抜いて1ページ目に、さーっと目を通して見ると、「な、読みやすいんだよ、それ、まあまあおもしろいし。」と高山は言った。確かにすいすい読める。これが結構な部数売れる要因のひとつかと思っていると、「俺、普通は読みやすいのしか買わないの。本が好きっていうより何かを読むのが好き、っていうかそうすると落ち着くって言った方があってる気がするな。」とまた高山の声がした。僕は「俺はどっちかっていうと勉強のために読んでるよ。あと本読んでの方が格好いいと僕は思うし。」と言った。「勉強だから僕も好きとかいうのではないな。読み

やすい本ももちろん読むけど普段は無理してんだ。」僕がそう言うと、「俺とは違うな、俺はごくたまにしか無理しない。それでも無理するのは、そうだな、10ページくらいかな、そこで続くか終わるか決まっちゃうな。」と高山が答えた。

「高山、パソコンとかゲームとかないんだな、あるタイプっぽく見えるのに、なんとなく。」

「生活が軌道に乗ったらパソコンは買うよ、ゲームも自分っていうよりも買うとしたら人のためだな。石の家パソコンある？」

「親父のが親父の部屋にある。俺も欲しいんだけどな。」

「インターネットだって何を調べるのかははっきりしてたら役に立つよ。友達がやってるのを見てたらそう思った。」

「そういや親父もゴルフ場の予約がこんなに出来ると思わなかった、って言ってたな。」

僕が高山から死角になっている、テレビの横にある本棚とCDラックの前から2歩あるき、流しの方を覗くと、高山は、「これとこれは出来るぞ。」と言ってフライパンの野菜炒めと、ガスレンジのコンロの中の、ハンペンを横から切って中にマヨネーズと一度下茹でしたエノキダケを入れたものを野菜炒め用の長い菜箸で指した。それから高山は同じフライパンで、油を足してそのまま軽くカルビを焼いて皿に盛り、コンロで鳥のささみを焼いてから、「『鳥繁』のまね。」と言って、わさびを表に塗った。

それが終わるとリビングの部分に移って、クローゼットから座布団を2枚出して、「石が来るって言うから応急処置で家から座布団持ってきた。」と言って足元に置いた。「次はなんとこれなんだよ。」と言って、背の低いタンスの引き出しをパツパツと全部抜いた後に、上にあった雑誌とCDを勉強机の上に動かし、1人で軽々と、ベッド用のマットレスの脇、部屋の真ん中に据えた。それから自分の足元の座布団を1枚はふたつに折り1枚はその上に乗せ、自分が座って見せた。「な、石がそこに座って俺がこうするとばっちりだろ。」と顎でマットレスを指しながら言った。「想像力と実験の成果だな、おそらくは。」と僕が言うと、高山は、「金が入ったらシステム変わるから。」と言った。

高山と僕が、出来上がった野菜炒め、ささみの焼鳥、塩胡椒して軽く焼いた牛カルビ、ハンペンにエノキダケとマヨネーズを挟んだもの、さっき買った安いワイングラス、取り皿、高山のいつも使っている箸と割箸、カマンベールとブルーチーズとフォークふたつをタンスの上に運び終わると、高山は僕が買ってきた赤ワインの栓を、まずまわりをコルク抜きに付いている小さいナイフで剥いでから手際よく引き抜いた。

「高山の家の近所に酒屋があるか分からなかったから、大学から駅まで歩く途中で買ってきたよ。」

「適当に買ってきたの？」

「三千元くらいの赤ワインで飲み応えあるのがいいです、って言ってみたら、セールに出たこれくれた。」

白いブラウスを着た40代くらいの女性の店員は、「Sale」とだけ貼り紙がしてある木箱から取り出したそのワインについて、「ちなみになんて言うんですか？」と僕が聞くと、「ベリーズの94サンテミリオンです。」と答えて、94年はどうだとか、ベリーズはフランスの会社でなくてイギリスの会社だとか、2、3ポイントをさらっと教えてくれた。どうでもいいと思ってあまり話を聞いていなかった僕は、お詳しいんですね、と言うは失礼だし、言葉を継ぐのにちょっと困ったので正直に、「僕はほとんど飲めないんですけど、友達が結構酒好きなんです。飲み応えあるほうがいいと思って。」と言った。

高山が、「じゃ、つまみの完成記念に。」と言って注いだワイングラスをちょっと持ち上げた

ので、僕も「寝ない程度に。」と言って高山の真似をした。ひとくち舐めた時、薬理効果がありそうな味がする、と思った。CDが止まっていたので、高山はワイングラスを持って勉強机まで行き、僕に「最近聴いて良かったものは？」と聞いた。「俺恥ずかしいんだけど、アルバイトしてないから、結構自分でも音楽を聴く父親に言って買ってくれるように頼むか、母親に『CDが欲しいんだけどなんとかならないでしょうか。』って頼むしかないんだよな。だからあまり自分で最近買ってないから分からないんだけど、父親が買ってきた日本のジャズピアノの大西順子とか格好よかったかもしれない。」自分でアルバイトをして稼いだお金で欲しい物を買うという経験は、高校1年の秋から高校2年の夏休みまでの間、自分の家から2駅横浜よりに下ったところにある区立図書館の近くの喫茶店でアルバイトしていた時期しかない。高山は「俺2枚持ってる。この前ニューヨークでライブやった時のやつ買ったんだよ。それをかけよう。」と言いながら、机代わりのダンスをまわって、CDラックの前に行き、その場にしゃがんで目当てのCDを探した。僕は夏までになにかアルバイトを探そう、出来れば定期的にやれて、頭も使える仕事があればいいな、と考えていた。けれど家庭教師以外に何かあるんだろう、語学が出来る訳でもないし、特別な資格を持って何かのレクチャーが出来るなんてこともないし、インターネットビジネスなんか学生の時に始めちゃうと格好いいだろうけどリスクもあるし、第一その知識もノウハウもアイデアもない。家庭用品か何かの発明というのはどうだろう、と思っていた時に、ピアノトリオの音が聴こえてきた。

「俺も全然詳しくはないんだけど、最近20代の若くて才能のある日本人ジャズミュージシャンって多いらしいよ。」と高山が言った時、僕は、「そういえば寺井、寺田、どっちか忘れたけど尚子っていう20代だと思うけど、女の人がフジテレビかテレビ朝日かでヴァイオリン弾いてた。」とつい2、3日前の夜のテレビのことを思い出した。確かニュース番組の中で背が低くてよく喋るパーカッションの人と、ピアノとベースとドラムで演奏していたと思う。格好いいな、と思った。

「高山って大学入る前は何かバイトやったことある？」僕はさっき自分の頭に浮かんだことを掘り返した。

「うん、高校の時は山岳部、と言っても夏は月山とか丹沢のハイキングコースとかに行くぐらいなんだけど、冬はスキーやったりとかね、それやりながらピザ屋で、バイクでデリバリーしてた。浪人の時も1浪の時は少しの間、東京の方で会社から会社に急ぎの荷物を運ぶバイク便をやってたんだよね。受験をちょっと舐めてた、というか、もしかしたらあまり本気で大学行こうと思ってなかったのかもしれない。」僕は、ふーんと相槌を打った後に、「山にバイクか。」と言ってみた。

「運動部に入ろうとも思わなかったし、どうしようかなって思ってた時、目についたのよ。バイクは高校行ったらすぐ乗ろうと思ってたね。北海道とか走ると気持ちいいかな、とか考えたりね、してた。けど高校3年の時実際北海道行くと、3日くらいでしばらく単車はいいわ、ケツも痛いし、って思ったけど。」

高山の高校時代の話も、昔からバイクに乗っていることも僕はその時初めて聞いた。「バイクは実家にあるの？」と聞いてみると、高山は「うん、1浪中にちょっと転んで左の足首骨折して入院してたんだよね、それ以来あまり乗ってなくて、だから大学受かったのかもしれないけど、車庫で汚れたまんまだな。石は原付？」と僕に言った。

「そう。とりあえず俺さ、高校1年の夏休み中にテニス部辞めてね、暇だから原付は取ったんだよ。高校の時は友達の家に行くときとか使ってた、今は図書館に行くときぐらいかな、使うのは。」

高校に入って初めての夏休みの8月第1週目の日曜日、先輩達の練習試合を見に行った帰りの電車の中で、帰りが同じ方向の同学年のやつにテニス部を辞めようと思っていることを打ち明けた。電車のシートの隣に座っていた山下というやつは、小学生の時からテニススクールのジュニアコースで練習していて、技術的には入部した時から試合に出ている先輩達のレベルに達していたと思う。今考えると、テニススクールのクラブに所属せず、そんなにレベルが高くない、僕達が通っていた高校のテニス部に入ったのは、高校までで真剣にやるテニスはやめにしようと思っていたからかもしれない。僕が、「俺来週から練習に行くのやめようと思ってるんだ。」と打ち明けたとき、山下は僕の言葉を予想していたように、落ち着いて一拍間を置いてから、「おまえ下手じゃないのにな。」と言った。僕達は2人で並んで、電車の横一列になったシートに尻を前にずらして座っていて、大きな向かいの窓から差し込む光に塵がゆっくり舞っているのを眺めていた。電車がすいているため、自分達の荷物で広く占領した対面のシートでは、同じテニス部1年の3人が、テレビゲームのことか女のことか何か話してふざけ合っていた。山下がそう言ってくれたことで辞める決心がついた気もする。何をやるのか分からなかったけど、テニスの練習で明け暮れるのは、これまででもう沢山だと思っていた。テニス部を辞めて間もない頃は、清々としたような気持ちと、退屈でどこか不安な気持ちが一緒になっていて、とにかく最初に思いついた原付免許の取得を速やかに行うことにした。免許を取った翌日には、母親から貰った金で電車で1駅行った駅前のバイクショップでスクーターを買った。バイクショップの隣のガソリンスタンドで、初めて自分でガソリンを入れると、電車で行く場合はさらに1駅下ることになる図書館に行った。駐輪場にスクーターを停めた時、車や人々の行き交う音と蝉の鳴き声は遠くで聞こえているようで、なんだかやけに静かに感じた。その後、高校1年の秋からアルバイトすることになる喫茶店に寄って、図書館で借りてきた藤原新也の本を少し読んで家に帰ってきた。

「やっぱり1回事故るとバイクはあまり乗んなくなっちゃうのかな。」と僕は高山に聞いた。

「ま、また乗ると思うよ、夏休みとか暇だろうし、無理しない乗り方も分かったし。」

「乗り方ってあるんだ」「煽られたら先に行かせて、混んでたらコンビニで休んで、体調の悪い時には乗らない。何人かで一緒に走った方が安全だな、仲間内で競走しなければ。」

それから高山はしばらく高校3年の夏休みにバイクで同級生と行った北海道旅行について話した。僕の高校3年の夏休みは、①横浜の予備校に夏期講習に行って、帰りに高校の友達とゲームセンターに行く。②スクーターで図書館に行って、ほとんど勉強せずに雑誌か、ビデオを見る。③家でテレビかビデオを見る。ほぼこの①から③で構成されていた。その夏休みに入ってすぐ自分から切り出して、付き合っていた女の子とも別れた。僕も彼女も、退屈で寂しかったから付き合うことになったんだと思うけど、その時の僕は、また1人ぼっちになりたいと思っていた。彼女は野暮ったくて機転もきかなくて、「隆史君はどうするの?」と僕に聞くのが口癖のようになっていた。今思えば、僕を好きだったのではなくて、好きになりたかったのだと思う。そして、高校3年になったある日気がつく、自分では気が進まないのに、友達とテレビゲームをしたりビリヤードをしている時のように、時間がバリバリと音をたてて潰れていっているような嫌な胸騒ぎがして、彼女と一緒にいることはもうやめようと思ったのだ。

「フェリーは3万いや4万くらいしたかな、東京、苫小牧往復でね。北海道まで出来るだけ安くバイクを持っていくにはどうしたらいいか、宅急便とかも調べてみたんだけどフェリーの方が安かった。」

「まあ総じて楽しかったと言えるかな、一緒に行ったやつと喧嘩もしなかったし。最初は北海道の南の首の辺りを1周して帰ってきちゃおうか、って話してたんだけど、行きのフェリーの中で、備え付けで部屋に置いてあった北海道の地図とかガイドブックとか見てるうちに気が変わって

、阿寒湖とか摩周湖とかの東の方まで行ってみることにしたんだ。もうバイクで北海道まで来ようと思わないかもしれない、って2人で話してさ。バイクにだって乗らなくなっちゃうかもしれないしね。それで2人でいくつかのルールを決めて、東の方にも行ってみることにしたんだよ。」

僕はワインが入っていたグラスにペリエを注ぎながら、「引き返す基準みたいなもの？」と聞いて、高山の話の先を促した。

「うん、まず走るのが義務になったら終わりにすることにした。実際にはずっと義務的に走っただけだね。それから疲れた方のペースに合わせる、まあ山岳部のやつと一緒にいったから山登りのルールを当てはめてるだけなんだけど、あと、なんだっけな、1日に走りすぎないこととかだっけな、バイクの走行テストをしている訳じゃないんだから、一応ちょっとはまわりの景色を眺めたりすると。ただそれも2、3日で飽きるんだけどね。」高山は鼻の下の髭を左手の人差し指と中指で抑えながら立ち上がって、「そんなに撮ってないんだけどさー、」と言いながら勉強机の引き出しを開けた。2、30枚の写真の束をそこから取り出して僕に背を向けて1枚、1枚手早く繰っている。「何枚か確かこっち持ってきたんだよね、これ支笏湖。」と言って机代わりのタンスの上に1枚の写真を放った。「ほら、どこだっけなー、ラベンダー畑、あと摩周湖、襟裳岬、これは知床半島のどこかだったと思う、確かこれが一番遠くまで行ったところかな。」高山は喋りながら1枚ずつポンポン重ねていった。

「知床半島って？」僕は数枚の写真をタンスの上をすべらして掴み、縁を左手で持ち眺めてみた。手前のガードレールの向こう側に、海を挟んで数十メートルありそうな絶壁が見えて、その風景をバックにバイクを傍らに置いた、カーキ色のジャンパーを着た10代の少年が髪を風でなびかせて写っている。向こうの方には青空と、絶壁の台の上に張り付いている緑が見える。「北海道の先っぽの角だよ。」高山は勉強机の上にあったレポート用紙に、鉛筆でささっと北海道の模式図を描いて説明した。「この人が相棒？」と聞くと高山はそうだとした。「なかなかいいやつなんだ。そいつも女にもてなかったから俺の相手をまめにしてくれた。」「今大学生？」「そう、なんとか工業大学、だったと思う。」めくって2枚目の写真を見てみると、今度は薄曇りの日の、小さいさびれた灯台の近影だった。休憩所の裏手の方にまわって撮ったようで、人気はなく日陰でさらに暗くなった灯台の近くに、今度は高山が立って小さめに写っている。今と同じ短髪で髭はない。緑がある所に黄色い花がぽつぽつ咲いている。「襟裳岬に行ったら観光客は誰もいなかったのよ、なぜか。休憩所とか売店の人達はいつもは結構いるって言ってたんだけどね。」高山は北海道の模式図の襟裳岬の部分の部分を鉛筆で指しながら説明した。高い透明度で有名な摩周湖は、キャンプ場でテントを張った2人の後ろの木々のさらに奥、キャンプ場は高台にあるようで写真の上の方に写っているが、「高台のキャンプ場の背景の湖」以上の印象は見る者に与えない。ラベンダー畑の写真には見渡すかぎり紫のラベンダーだけが写っていて、高山もその相棒もそこにはいない。手前の方は少しボケているが、向こうに行くにしたがってゆるやかに登る丘の上に、一面に咲いたラベンダーが風になびき、心持ち傾いで写っている。これは写真に撮られるために作った風景だ、と思った。支笏湖の写真はおそらく立ち入り禁止と思われる、湖の縁にすすきが繁っているぬかるみで撮っている。高山の相棒はバイクに乗るためのブーツのままそこに立ち靴底を地面に数センチ埋めている。曇り空に湖面は穏やかそうで、まわりに人はいないような静かな感じがする写真だ。

「もう北海道はバイクじゃ行かないだろうな。やっぱり移動が目的になっちゃうからね。」

「けど、1回は僕もやってみたい気はするな、中免があれば。」と僕は言った。

「バイクで旅行してるのは女の人も多かったよ。女どおしとか。あんまりいい女いなかったか

もな、運が悪かったのかもしれないけど。」

「この時って高3だろ、受験勉強は別にいいやって感じだったの？」僕がそう質問すると高山は間髪入れず、「うん。」と答えた。「そんなに勉強しなくても入れる所に入ろうって考えてたからな。現役の時は当然受けたところ全部落ちたけど。」

「そうか。」僕は表面にワサビを塗ったささみの焼鳥を食べてみた。塩胡椒して焼き、チューブから出した練りワサビを塗っただけのものだったが、とてもうまかった。「高山、このワサビ、正解だな。めちゃくちゃまいよ。」僕が箸でささみを掴んだままそう言うと、高山は、「塩胡椒をきつめにふるのがコツなんだよな。」と大きめに切ったブルーチーズをフォークで刺して食べながら答え、右手で持っているグラスからひと口ワインを飲んだ。「焼鳥屋じゃチーズは出てこないしな、安上がりだし、ちょくちょく来いよ、石。」「うん、授業の帰りに寄るよ、結構暇にしてるからな、俺。」窓は、さっきから僕が少し開けたままにしていたが、外は静かでCDの演奏だけが数秒流れていた。少し酔ったのかもしれない。

「石は演劇やってるんだっけ。」高山が自分でワインを注ぎながら僕に質問をした。僕はペリエを口に含んでから、「うん、なんでかは分からないんだけど、何か書いてみたいと思ったんだ。今まで文章を書いたことなんか無いのにな。何を書くのかも決まってないのにさ。」と言った。

「もう何か書けた？」

「まず練習しようと思うんだ。舞台に2人の人物と質素な舞台セットがある。それだけで10分から20分もつコント。これを練習してから、何を書くのか決める。コントでなくてもいいんだけど。」

「ふーん、まず練習か。」適度のアルコールが高山の食欲を増進させたようで、エノキダケを詰めたハンペンに醤油をかけたものをしきりにパクついている。

「いつか何か書きたいとは言ってるけど、とりあえずは裏方だな。」と僕は外を見ながら言った。この位置からだと、窓からは電線だけが見える。

「じゃあ、練習中だ。石はどっちかっていうとも静かなほうだし、観察力もあると思うし、向いてるかもね、何か書くの。」

「書かない時の評価が一番高いのかもしれないんだよな、これが。」

「今作ろうよ、何か。」高山は酔ってきたせいもあるのか、積極的な提案を僕にした。

「この一連の練習シリーズはね、『2人のつづき』って言うんだよ。いくつか作ったのは、まず、サラリーマンの早朝野球編。モデルは吉田なんだけね。それから、母親と子供と飼い犬の話、あとは、よくあるけど歯科医の話、架空の王国の国王が臨席する会議の話、高校教師が授業をしながら心の中で独白するみたいなやつも作った。次はじゃあ、ライダーでもネタにする？」

「いいね。1人はバイク乗りで1人は違うやつ、例えば、襟裳岬のお土産屋のおばちゃんとかにしてくんない？」

「じゃあ次来る時まで書いてくるよ。1人じゃないと書けないんだよね。」

高山は、「そりゃそうだよな。」と言って、心持ち赤い顔をしてトイレに立った。

少したって戻ってくると、タンスの横に座りながら、

「そういやクラスの女とあまり口聞いてないよな。」と高山が唐突に言った。

「うん、女のグループどおし仲悪いのが、なんとなく俺達とも会話がない原因のひとつのような気がする。」僕は高山が何を話したいのか待ってみた。

「今度飲みに行ってみようか、桜井たちあたりと。この前、政治学の授業の時、吉田と中村と一緒に桜井とか林とかとちょっと話しててそんな話になったんだ。」高山は牛カルビを口に含んでから、また自分でワインを注いだ。

「吉田にも残しときなよ、少しくらい。」僕はちょっと腰をあげてテレビの横のCDラックの所に次にかけるCDを物色しに立った。アルバム終盤で大西順子のソロが始まっていて、自分の意思で完全にコントロールしているスピード感と、選ばれた和音の独特な響き、余力をもって疾走しているような知的な印象、おそらくはこれがスウィングということなのかな、と思って高山の話を上滑りに聞きながら、少し興奮していたので立ってみたのだ。

「なんだっけ？」と僕は高山に聞いた。

高山は注ぎ足したワイングラスをひと口舐めて、「石って今彼女いんのか？」と言った。

僕はCDラックの前にしゃがんだ姿勢で首だけちょっと高山の方に向けて、「いないよ。」と言った。高山は「ふうん。」と言ってからまたひと口ワインを舐め、「じゃ早く作ろうぜ。」と言った。

「俺、昔適当にやって失敗したことあるんだ。」「どういうこと？」「高2の時バイト先の女の子に振られて、そのすぐ後から高3の夏休みまで付き合った人がいて、たぶんそれ失敗だったんだ、女欲しかったからしょうがないけど。」

「ふうん。」

「高山、大西順子ってあと1枚あるって言ってなかったっけ？」

CDラックを見ていてなかなか見つからないので高山に聞いてみると、高山は「『CRUS IN』』っていうのがあるよ。」と言いながら立ってきて僕の横にしゃがんだ。高山は、前に聴いたときに突っ込んだ場所をなんとなく覚えていたようで、3列あるラックの1番右の列の中段からスッと引き出して、「これだ。」と言った。CDの演奏がちょうど終わり、高山が、「慎重派の石本君、私にかけて差し上げましょう。」と言って、勉強机の上にある小さいCDコンポのCDを入れ替え、スタートボタンを押した。僕が、「慎重派？」と高山に聞くと、大西順子が最初の和音を響かせた。

「私は夏休みはその事務所には行かないのよ。」と、内山さんはコンビニで買ってきたポテトチップスを食べながら僕に言った。ラウンジには他に、マンガを読みながら大森さんを待っている戸野さんと、叶岡がいて、叶岡は僕の隣でソファに座って、写真ファイルやマンガや連絡ノートに過去の舞台の台本、青函、道端で配っている安売り店のちらしなどが散らばっている、脚の短い机の白い地肌が見える部分を閉じそうな目で呆然と眺めている。さっきまでは内山さんと僕の話に加わっていたが、一夜漬けの勉強が続いているようで眠気が襲ってきたらしい。普段から口数は少ない方だが、この状態では目を開けたまま眠っていると言ってもいいくらいだ。僕は、内山さんの言葉に返事をする前に、「叶岡、そこには何も無いぞ。」と叶岡の視線の先の机の地肌の部分を左手で指差して、右手で叶岡の肩を揺すった。内山さんも笑いながら、「叶岡君、そこには何があるの?」と言った。戸野さんが足を組んだ腿の上のマンガから視線を起こし、「叶岡、今日俺たちと飲みに行ったら確実に寝ちゃうだろ、またにするか。」と言った時、叶岡は反射的に、「大丈夫です。」と言ってから、「分かりました、寝ます。」と言って両肘を枕にして目をつぶってしまった。

「内山さん、なんでしたっけ?」笑いながら足を組みなおし内山さんにそう尋ねた後、新しい煙草に火をつけて、「大森さん今テストでしたっけ?」と戸野さんにも質問をした。戸野さんは、「テストだろ、じゃなきゃ学校来ないだろ、この時期。」とマンガに目を通しながら答えて、内山さんは「君たちよく飲むよね。」と戸野さんに言った。戸野さんは、「しょうがないだろ、合コンなんだから。」と答えた。内山さんがポテトチップスの袋に手を伸ばしたので、僕もそれに続いた。

「今年は8月から留学するつもりなの。」内山さんはそう言ってコーラをひと口飲んだ。「どこですか?」と僕が聞くと、「オーストラリアのクウィーンズランドっていうところ。」と答えが返ってきた。戸野さんが、後ろの背もたれに引っかけたライダーズジャケットから新しい煙草を取り出そうとしながら、「初耳じゃん。」と言った。戸野さんは褪めたグリーンのTシャツを着ていて、眉を少し抜き、心持ち伸ばした髪の前髪を上げている。内山さんは、「だってまだ決まった訳じゃないからあまり言ってないもん。」とコーラを飲みながら言った。

「留学って言ってもひと月くらいよ、自費だし。海外旅行したことないから一度行って見たかったのよ。」

「お金かかるんじゃないんですか?」と僕が聞くと、内山さんは、「育英会の奨学金あまり使ってなかったから大丈夫なのよ、そんな高くないし。」と答えた。

「50万くらいですか?」とあてずっぽうに聞くと、「もうちょっと高い。」と内山さんは言った。ふーんと言って、煙草の灰を、机の上の吸殻がこんもりと溜まった灰皿に落としながら、次の質問を考えていると、戸野さんが、「内山って海外志向あったんだ。」と言い、内山さんは、「ネタ探しに近い。」と返事をした。

大学1年の秋の舞台準備中、何かいいアルバイトがないか舞台制作会社の人に相談した時に、「あなた、モノ書く人でしょ、それならライターの人知ってるから聞いてみたら。」と言われ、内山さんは谷川さんの事務所の電話番号を教えて貰った。その時のサークルの舞台が11月の頭に終わると、内山さんは、早速谷川さんに電話をかけ、南青山にある事務所に出掛けて行って、そこで初めて谷川さんに会った。1階のブティックの裏手にまわり、奥の階段で2階に上がってインターホンを押すと、男の声で、「どうぞ」と言われたので、「北岡音楽出版」とプレートがかかっているドアを開けた。向こうからもドアを開けようとしてた谷川さんと玄関先で会ったので、内山さんが自分の名前を言うと、谷川さんは、「待ってたよ、採用だからちょっと上が

ってってね。」と言った。仕事がまわっていることを印象づける、雑然としている中に最低限整理してあるような事務机を4つくっつけた場所の、奥手のソファに内山さんを座らせて、「谷川ですけど、内山さんのことは清水さんから聞いてたから、よろしくね。」と谷川さんは内山さんに自己紹介をした。

「最近の仕事が自然と増えてさ、翻訳だ、ちょっとした構成だ、整理だ、取材だなんだってね、人手が欲しかったのよ、英語どれくらい出来るの？」

谷川さんはそもそも音楽誌の編集をしていたが、この事務所に移ってからは、ここの社長の本業が芸能プロダクションの経営という関係で、テレビの構成もやるようになった。最近では、チャンネル数が爆発的に増えたデジタル衛星波のテレビの仕事が増え、音源の配信セールスを絡めた音楽番組、証券会社、投資顧問会社が番組提供する金融商品に関する情報番組、旅行代理店機能を持つチャンネルの、観光スポットのプロモーション映像制作などの仕事を、社長が番組制作とタレント契約をセットにしてまとめてくるようになった。

内山さんが初めて谷川さんに会った時、谷川さんは、「これからは分野にかかわらず、編集者の質と量が求められると思う。」というようなことを言い、僕も同じことを後で言われた。番組に関わる情報の整理と下訳、観光地のプロモーション映像の制作準備、タレントオーディションのためのプロフィール作成などが、当初内山さんに割り当てられた仕事だったが、仕事の出来がよかったことから徐々に任される範囲が広くなり、仕事が増えていっても、固定給でいいと内山さんが言ったことがそれをさらに助長した。

「うまくもたれあってるのよ。」と内山さんはアルバイト先の事務所のことを僕に言ったことがある。事務所の社長は大卒の元タレントらしい。

内山さんのアルバイトの話は前にも聞いたことがあったが、「石本君やってみない？」と持ちかけられたのは内山さんの留学の話聞いたその時が初めてで、僕は即座に、「そういうアルバイトしてみたいんです、マジで。」と言った。「英語は得意なんだっけ？」という質問には「受験の時は得意だったんですけど、ヒアリングは全く自信がありません。」と正直に答えた。その翌々日、テニス用の白いキャップに陽射しを受けながら、サークルの溜まり場があるラウンジに向かって歩いている間、僕は一昨日、内山さんと話した内容を頭で復習していた。ラウンジに顔を出すと、テストが終わったらテニスをやろうと誘ってくれた大森さん達に混ざって、珍しく「私もやってみてもいいかな。」と言った内山さんも約束通りそこにいた。僕は内山さんの顔を見た瞬間に、「テストやっと終わりましたよ、いつでも内山さんのバイト先連れてって下さいね。」と言った。内山さんは足を組み、煙草の煙を吐き出しながら、「谷川さんもいつでもいいって。」と言った。

テストが終わった翌日からが大学に入って初めての夏休みで、僕は渋谷で地下鉄に乗り換える途中に、高山のことと、内山さんのことと、欲しい洋服のことと、久振りにやったテニスの壮快感について考え、そこかしこを歩く薄着の若い女の子に目を奪われた。ちょうどいい、と僕は思った。高山もバイク旅行だなんだと急がしそうだし、この夏も高校1年の時の夏のように時間をもてあますだろう。パソコンも洋服も携帯電話も欲しいし、出来れば自分の金で買いたい。内山さんの次回作はもう構想は出来てるのだろうか、きっとこういうことが電子メールの内容にふさわしいんじゃないか。

地下鉄を表参道で降りて外に出ると今日もよく晴れていて、僕はまたシャツの胸ポケットから煙草を出して火をつけ、吸いながら歩いた。目印のブティックの手前10メートルで煙草を投げ

捨て、これは必要悪だ、と思った。内山さんから教わったとおり、ビルとビルの間から裏手にまわり、そこから2階建てのビルに入って階段で登る。「北岡音楽出版」の亚克力プレートは水色の地に白ヌキで出来ていて、色使いが以外な感じがした。緊張していたので、「金のため、金のため、洋服とか。」と頭の中で唱えてからインターホンを押すと、「どちら様ですか？」というニュアンスを感じにくい調子の男の声が聞こえたので、地下鉄の中で考えた通りに、「内山さんから紹介されました、W大学の石本です。谷川さんに会いにきました。」と言った。ちょっとたってからいきなりドアが開いて、「待ってたよ、谷川です、どうも、どうぞ入ってください。」と髪をオールバックに撫でつけた、小太りだけれども下がり気味の二重の目と通った鼻筋を持った整った顔立ちの、30代半ばに見える男性に部屋の中に入れられた。後ろから見ると、薄いグレーのスーツが形良くよれていて、ソファで向き合った時に、中に白いティーシャツを着ているのに気付いた。「英語が訳せると、今はみんな採用するんだ。学生だとアルバイトだから安くてすむし。」と谷川さんは喋り始めた。僕は緊張していたので咳払いをしてしまった。谷川さんは僕の様子を察して、「内山さんの舞台は僕も1回見たよ、テニススクールが舞台なんだけど、僕は『めぞん一刻』っていうマンガ思い出したなあ。石本君は1年生なんだっけ。」と僕に聞いた。部屋には谷川さん以外の人はいない。書類がファイルに入れられて並んでいたり、積んであったりする4つの事務机の上には、3台のパソコンが置いてある。ここのスタッフは3人なのか、4人なのか、と考えた。

「内山さんが来れないって言いまして、『早めがいいなら1人で行ってもいいんじゃない。』と言われてましてお邪魔しました。」と喋りながら敬語がおかしいと思った。

「仕事はね、とりあえず英文資料の翻訳かな、メールとファックスで届くやつと。これが主で、後は慣れてきたら僕から相談するからね。よろしくね。」

それから谷川さんはしばらく自分の経歴について話した。大学在学中から、70年代前半に創刊したロック雑誌に人のつてからアルバイトで関わり、そのうちに新譜の紹介記事を書くようになった。NHKのラジオ講座を聴いたり、アルバイト代を全部注ぎ込んで、同じ大学に来ていた留学生に個人授業を受けたりして、日常会話レベルではモノにした英語を使って、外国人ミュージシャンが来日した時のインタビューもやるようになってからは、大学生ながら1人で生活していくには充分の給料を貰うようになっていた。

「当時はそんなに喋れる人っていなかったから、安くて使える通訳って少なかったのよ。」と話した谷川さんは、僕から見た感じよりもちょっと年を取っていて、「もう今年39才になる。」と言った。結婚していて子供も2人いて、上の女の子はもう高校1年生らしい。大学を出てしばらくはその雑誌の編集部で働いていたが、そのうち雑誌が売れなくなって会社も谷川さんも困っていた頃に、別の雑誌社で働いている妻の仕事関係の人づてで今の事務所の社長を紹介してもらってここに移り、この夏で8年目になった、と谷川さんは言った。

ひとしきり話した後に谷川さんは、「石本君も何か書く人なの？劇団で。」と僕に質問した。僕がピクッと動いた時に、僕のシャツの胸ポケットに入っているキャスター・マイルドに気付いて、「煙草吸っても構わないよ。」と言ってくれたが、谷川さんは煙草を吸わないようなので、「いいんです。」と言ったまま、うつむき加減にちょっと黙ってしまった。とにかく自分から答えようとなんとか思い直して、「何か書きたいんです。けど、今は練習中なんです。」と汗を掻きながら喋って、「そのうちに何か書きたいと思ってるんです。」と同じようなことを繰り返した。

「練習中なんだ。」と谷川さんは僕の言葉通りになぞって相槌を打った。僕は話題を変えたいと思って、「翻訳が主な仕事なんですか？」と仕事の質問を試してみた。すると、谷川さんは、

「さっき言ったみたいに専門チャンネルの仕事も多いけど、普通のテレビチャンネルの仕事もあるんだよ。」と言いながらソファを立て、四角にくっつけている事務机の上からビデオテープを1本取り、ソファの右手に据えてあるビデオデッキ内蔵型テレビの中に入れ、スタートボタンを押した。谷川さんが、「ほら、よくあるでしょ、旅番組の構成もやってるからこういう取材もある。」と話す声を聞きながら画面を眺めていると、おそらく手持ちのデジタルビデオカメラで撮ってきた、電車の車内の光景が映った。窓を通して海が見え、サーファーの一群が小さく点々と見える。「リサーチしてから、ビデオ持ってロケハンした後に、うちのタレントを連れて行ってロケに入る。ディレクターも我々がやれば、300万しないで1時間番組をあげられることもある。」画面を見ながら谷川さんはそう言った。画面には大柄で丸刈りの、おそらくは運動部と思われる男子高校生が1人映っている。うつむいて目をつぶっているが、眠っている訳ではなさそうだ。車内のアナウンスが次の駅の名前を呼び、彼が急に窓の外に振り返った所でカメラも窓の外を追った。窓の外には海と、海岸を走る車が見え、駅のホームが視界に入ってきた。「こういう事前取材をもとに構成をおこしてから、実際のクルーと現地に行くは無駄が少ないんだ。そのうちこういうのもやろうか。」と谷川さんは言った。

夜の8時過ぎに家に帰るといつものように父親は帰っておらず、母親はテレビで歌番組を見ていた。父親は平日はたいてい夜中まで帰ってこないし、土日どちらかは仕事で家にいないのが普通で、昔から夕食の時間は僕に合わせて設定されていた。僕が小学生の頃は僕が見たいテレビがある夜の7時過ぎから、中学校に入ると部活が終わる時間に合わせて、秋冬は7時半くらい、日が伸びてくると母親は夕食の支度をして僕の帰宅を待ち、8時をまわってから食べ始めた。高校に入って帰宅時間が不規則になると、だいたい9時を過ぎると母親は食事を1人で済ませているようになり、その頃からなんとなく母親と顔を合わせて食事をしたくない時は9時を過ぎてから家に帰るようになった。

「昨日言ったとこ、今日行ってきたよ。」と食事の用意が粗方出来た台所の机に座ってテレビを見ている母親に声をかけると、母親は、「どうだったの?」と顔をこちらに向けながら返事をして、「バイトも久々じゃない。」と言った。

「結構大変そう。やっぱり主に翻訳をやるんだよ、勉強しなきゃいけなくなった。動機づけになっていいかもしれないけど。」僕はそう言って台所を横切ってリビングに入り、背が低い分厚い台の木製テーブルの上に置いてあった夕刊を拾ってから、台所の机についた。僕が新聞の4コママンガに目を通して見ていると、母親に「隆史は英語が得意なんだっけ?」と聞かれたので、「受験の時はね。」と他人にいつも答えているように答えた。

それから僕は母親といつものように2人でテレビを見ながら夕食をとった。だいたいいつも母親がテレビに向かって合の手を入れるのを聞いているが、共通の話題が全くない訳ではない。母親の買った洋服や買おうとしている洋服について話したり、母親の乗ってる車の調子や、ここ2年くらい通っている英会話教室の様子を聞いてみたりする。母親がよく会ってる茅ヶ崎に住む昔からの友達の安否を尋ねてみることもある。あとは母親からの差し障りのない質問に僕が答える。父親のことは話題になることがあってもそんなには続かない。今の父親は母親の興味をあまり引かないのかもしれない。

僕は母親の作った八宝菜を食べながら、「お母さんならすぐ出来るよ、僕より英語出来るんだから。」と言った。

「けどそれだけじゃないでしょ。何か新しく書いたりするんだったら私は出来ないわよ。」

「いや、基本的には翻訳、っていうか下訳するのが仕事みたい。けど普通のアルバイトよりはおもしろそうだな。」

「せいぜい頑張って稼いで下さい。」

僕がいつも根掘り葉掘り聞かれるのを嫌がっているので、母親は自分から質問を切り上げた。そこで、いつもはあまり言わないのに、「これ、うまいじゃん。」と母親の八宝菜をほめてから、「まずパソコン買おう。」と言ってみた。母親に聞かれる前に、「それから携帯買うわ、やっぱり。」と言ってから、「最近柳田さんは元気にしてるの？」と家にもたまに来る、母親の親友のことを聞いてみた。母親はテレビの司会者のコメントに笑いながら、「一昨日横浜で一緒に買物したのよ、私はほとんど何も買わなかったけどね。」と言った。

北岡音楽事務所に5日間連続して通うと、僕にも言われなくても取りかかれる仕事が出来てきた。4つあるうちのひとつの机には僕に割り当てられた英語で書かれたレポートが平積みになっている。衛星放送の番組提供をしている外資系投資顧問会社と契約するリサーチ会社のレポートには、日本の地価、雇用、金利、設備投資、一般消費などの経済動向、財政、金融、貿易政策の見通し、補欠選挙予測、企業評価、話題の商品についてなど諸々の分析があって、それらから導き出された投資アドバイスは、番組放送と並行してデジタル波で送出される。それらは契約企業または個人によってアウトプットされ、契約者は投資アドバイスのアウトライン、第一義的な情報収集は番組で得て、情報の核となる部分、一次情報の出典とその分析、オリジナルでより深く、時に驚くべき情報の伝達は、送出電波に厳重なガードを施して提供されるそのレポートで行われ、契約者はこのレポートを得るために番組契約していると言える。その隣にはパリ、ロンドン、ベルリン、ブリュッセル、ウィーン、モスクワなどから電子メール、ファクスで送られてきた音楽関係の情報が束になって置かれている。そこには番組制作において個人的な契約を結んだ、音楽雑誌の編集者、プロのミュージシャン、マイナーレコード会社やライブハウスのオーナー、大学講師、現地のチケットガイドの社員などから提供される、現地のコンサート、ライブ情報と新進ミュージシャンの情報、彼らの契約状況やその評価が記してあり、それらの情報を出発点にして、デジタル衛星波により配信セールスされる音源の選定がなされていく。現地の情報提供者は独自で出資者を募り、売り込むべき現地のミュージシャンと、スタジオで録音するための施設費を負担する出資者をセットにして番組に持ち込んで、生じた利益は番組を提供する大手電機メーカー、ミュージシャンを売り込んだシンジケート、諸処の契約を整理し、番組と音源セールスを最終的に管理する、番組提供社である電機メーカーが大部分出資する広告会社によって配分される仕組みになっている。通常、セールスが2~3万件を超えたミュージシャンは、その電機メーカーの子会社であるメジャーレコード会社と新たに契約し直して再デビューし、日本国内では、CDショップ、コンビニエンスストア等の販売チャンネルも活用することとなる。ミュージシャンを発掘したグループは、この段階である程度の利益を得ることになるようだ。最近では、衛星デジタル波を使った配信セールスで、イギリス、ドイツ、フランス、日本など放送エリアの都市部でのセールスの合計が10万件を超える楽曲も出てきている。北岡音楽事務所では、音源の配信セールスによる利益配分を番組提供社の関連会社である広告会社と折衝して決めているが、実際に音源を選定している、何人かの音楽プロデューサーのコーディネイトを自分達で行っているために、その広告会社とは結構有利な交渉が出来ているらしい。こういった事情から、デジタル波を使った音源セールスでのコピーライトはひとつの楽曲で10社を超えることもある。

そのような英文で書かれた資料のうち、専門的な知識を必要とせずに訳出出来る資料を僕の持ち分とされ、せっせと訳しては、事務所のもう1人のスタッフである小川さんという30才くらいに見える女の人にチェックしてもらおう。北岡音楽事務所でのテレビ番組制作の仕事は、社長が共同経営者となっている制作プロダクションにまわしているが、小川さんはそのテレビディレクターからこちらに籍を移して、番組の構成と、たまにロケのディレクターもやっている。大学4年で就職口が見つからなかった時に、ニューイングランドの大学に私費留学して英語と国際政治学を学んだ、と昼の弁当を食べながら僕は小川さんから聞いた。

毎朝10時30分に事務所に行くとだいたい小川さんがいて、パソコンを使って何か仕事をしているか、奥の部屋の編集機でロケテープの編集をしているか、国際電話で何か打ち合わせをしている。僕はあてがわれた机に座って午後1時くらいまで、小川さんから言われた僕の割り当て

分に目標を定め、クラシック音楽が適当なボリュームで流れる中、時々休憩をはさみながら訳し、黙々と決められた書式で打っていく。昼になると小川さんと一緒に昼食をとる。小川さんが家で弁当を作って持ってきてるので、僕も近くの弁当屋で弁当を買ってきて、打ち合わせ用のソファに向かい合って座り、脇のテレビを見ながら食べる。テレビでは大抵どこかの国のサッカーの試合の再放送をやっている。2人で弁当を食べながら、僕達は、仕事の進み具合や、内山さんの噂話や劇団の話、小川さんの結婚生活について、小川さんの好きなサッカーのこと、僕の大学生活のことなんかを話す。それから、また4時過ぎくらいまで頑張ってレポートと格闘する。「分からないことはそのままにして、まとめて聞いてね。」と言われているので、机の右肩には放棄したレポートが数枚つつクリップに留められ、重ねられている。午後には谷川さんがやってきて、事務処理をするか、テレビを見るかして、また外出する。夕方には買い物を頼まれたり、丸の内にある衛星放送会社や地上波のテレビ局に、放送素材や書類の受け渡しなどのおつかいを頼まれることもある。だいたい午後5時30分から6時までの間に、小川さんか谷川さんから、もういいよ、と言われて家に帰ることになる。

小川さんとその日、いつものようにソファに座って弁当を食べながら、テレビで外国のサッカーの試合を見た。小川さんに聞くと、「これはスペインのサッカーよ、トヨタカップって聞いたことあるでしょ、世界一のチームを決めるやつ。去年のチャンピオンはこのリーグから出たのよ。」と教えてくれた。前に小川さんにサッカーが好きな理由を聞いた時は、「知的なところとスポーティなところ。」と言っていた。小川さん自身は昔、バスケットボールをやっていたらしい。小川さんはどんぐりのような眼をしていて、髪はショートカットにしてほっそりしている。僕は昔はロングヘアだったんじゃないかと何故か思っている。背はそんなに高くなく、160センチくらいだ。

「そう言えば石本君が昨日帰った後に、谷川さんが、『明日は石本君と一緒にテレビ局に行って打ち合わせしようかな。』って言ってたのよ。」

「何時くらいなんでしょう？」と弁当の肉団子を食べながら僕は小川さんに聞いた。

「また夕方くらいなんじゃないの、4時とか4時半とか。今日は確か渋谷のスタジオに行ってると思うし。」テレビは僕の方に近いため、食べながらだと小川さんが座っている方が見やすい。僕はソファをちょっと斜にずらして、弁当もテーブルに斜めに置いて食べている。

「どこの放送局なんですかね。」と僕が聞くと、

「一緒なんだから初めて行くところだと思うよ。」と小川さんは言った。

谷川さんは僕が仕事をしやすいように、と言ってもまだ頼まれ物を運ぶくらいなのだが、僕が何かの用事で行く場所には最初くっついて行ってきて、「うちの方で構成と翻訳を一緒にやってます石本です。」と紹介してくれた。僕のことをアルバイトという風には言わなかった。そのことを谷川さんに指摘すると、「テレビ局は古いままだけど、昔と違って、単にアルバイトじゃなくて、大学生でも企業と契約して働いたり、自分の専門分野の情報を提供して報酬を得たりすることがあるんだってことがみんな分かってきたからね。石本君のことをアルバイトって紹介してうちが得することないし。」と言った。僕が紹介された人の中には内山さんを知っている人もいて、察しよく、「内山さんの後輩？」と僕に聞く人もいた。

「外出先が増えるのは悪くありませんね、気分転換になるし。遠すぎるのは嫌だけど。」と僕が言うと、小川さんは、「遠いところに行く仕事はないわよ、無駄じゃない。」と言って僕が買ってあげた冷たい缶入りのお茶を飲んだ。

それから午後は、4時に谷川さんが帰ってくると想定してその時間をめどに、新しい電子ディスプレイの商品開発を行った日本の企業についてのレポートを翻訳した。「electrofi

「m」と仮に呼ばれているその商品は、電気信号により伝達された映像をディスプレイの基板底部を化学的に変成、安定化させることによりいったん焼き付けても、再び電気信号を送るとまた新しい映像を焼き付けられるというものらしい。基板底部の素材の分子構成は、特定の条件を与えると焼き付け前の状態にほぼ再現することが可能で、その状態を経由してまた新しい映像をプリントすることが出来る。手に触れるフィルムの表面はナイフを使っても傷つかないし、水にも強い。それほど複雑な型でなければ折ったり、曲面にも貼り付けられることが出来るし、内部構造が一様なので壊れた部分の修復もそこだけ貼り替えれば簡単に直せる。焼物みたいなものなので帯電もしない。

「携帯端末がこれだけ発達してもプリントアウトやレコーディングという行為が無くならないのだから、デザインも後から送れるブックカバーやMDケースを作ってみようと思った。」商品開発した人の発想はそこから始まったが、強度と修復性の性能ごとに、厚さ数ミリから数センチまで何種類にも分かれていて、現段階でも、自動車、旅客機、建築物などの外装に応用可能だ。

商品についての説明と今後の見通し、企業のこれまでの主な業績、経営陣、開発スタッフの経歴などについては翻訳出来たが、専門用語を使った技術部分の説明は全く分からなかったので飛ばして、いつものようにデスクの右肩にクリップで留めて重ねておいた。把握出来てない所があるのに他のところを訳さないといけなかったためいい加減な所もあったが、20枚程度のレポートのうち、技術の説明部分7枚を除いてなんとか訳し終えようとしている時に、外出先から谷川さんが戻ってきて、「おっ、石本君だいぶ顔が熱そうぞ。」と顔を上げた僕に向かって声をかけてくれたので、僕は「今回は難しかったです。だからですよ。」と笑いながら言った。「収録はうまくいきました？」と斜向かいの机でデスクワークをしていた小川さんが谷川さんにそう聞くと、谷川さんは、「小川君の回だから問題なんかないよ。」と答え、肩に背負っていた大きなショルダーバッグをソファの横にドンとおろし、右手に持っていたコンビニエンスストアの袋をテーブルの上に置いた。小川さんのご主人が今日収録があった音楽番組の、今回の担当ディレクターだったようだ。谷川さんはソファに座って、ショルダーバッグからノート型の大判の手帳を、コンビニエンスストアの袋から買ったばかりの薄手のタオルとミネラルウォーターをテーブルの上に出した。それからすぐにタオルを包んでいるビニールのフィルムをビリビリ破いてゴミはコンビニエンスストアの袋に入れ、ミネラルウォーターのキャップを開けると、滴る汗を右手に持ったタオルで拭いながら、左手に500ミリリットルのペットボトルを持ってゴクゴクと飲んだ。「暑そうですね、外。」と谷川さんの一連の行動の見て僕がそう言うと、谷川さんは手帳を見ながら、「そう、今度はあと少ししたら、石本君とテレビ局行くよ。」と言った。

正面入口の脇にハイヤーを止めた運転手が、もう間もなく乗せて帰るべき人物が現れると思っているのか、単に車内が禁煙になっているからか、5分くらい前に運転席を降りて携帯灰皿を片手に煙草を吸っている。車の中はクーラーで冷えているらしく薄手の黒地のチョッキのようなものを着ているが、強い西陽が煙草を吹かす運転手の横顔を照りつけていて、その西陽は僕達が座るロビーの喫茶コーナーにも差し込み、オレンジがかった日向と落ち着いた日陰をはっきり区切っていた。エレベーターに近い日陰になった4人席に、谷川さんと、谷川さんが担当する旅番組のディレクターの守口さんと、僕が座っていた。谷川さんに、「うちの石本です。」とだけ紹介されて、ごく簡単な挨拶を済ませた後はすぐに、2人は早く片付けなければいけない仕事の打ち合わせを始め、僕は最初の15分間は2人の会話を聞き漏らすまいと緊張して耳をそばだてていたが、どうやら僕が聞いていてもいなくてもどうでもよさそうなことに気付いたたので、コーヒーに口をつけながら、時折入口を出たり入ったりする人の流れや、ガラス張りになって見渡せる

入口の脇の外の風景、喫茶コーナーで打ち合わせをしている他の人々の様子を眺めていた。外を眺めているとハイヤーの近くにスーツを着た7、8人の男が群れて二手に分かれ、片方の3人がハイヤーの中に乗り込んで運転手がドアを閉めた。残った方が全員で頭を下げて見送った後、おそらくはその中で一番若い、20代後半に見える男がおどけた様子で震える仕草をした。

「石本はここ初めてだよな。」

谷川さんは自分でも分かりきっている質問をわざと僕にした。2人の話はよく聞いていなかったが仕事の打ち合わせが終わった合図だろうと思って、

「初めてです。」と簡潔に答えて次の言葉を待った。

「内山の後輩なんですよ、W大の。」と谷川さんが守口さんに言うと、

「へえ、そうなんだ、何年なの石本さんは。」と守口さんは僕に質問をした。守口さんも内山さんを知ってるらしい。僕は、「1年です。」と答えて谷川さんが何か喋るのを待ってみた。

「それで一応、石本にもこちらにお邪魔しながら、そのうち構成の方もやってもらおうと思ってます。石本も何か月か衛星波の方の仕事をやってもらっていて、今は内山のようにいろいろやってもらってます。よろしく。」

谷川さんがそう喋った後にはいつものように、僕は「よろしくお願いします。」とだけ付け加えた。守口さんは肩パットが入ってない紺のジャケットの左肩の部分に右手を乗せ、睡眠不足が習慣になっているような心持ち腫れた丸顔をこちらに向けた。短髪で前髪を立たせていて、一重で目尻はやや上がり、鼻は大きい。昔はもっと痩せていていい男だったのかもしれない。守口さんは僕の目ではなく顎の辺りを見ながら、「じゃあ、よろしくお願いします。」と笑顔を作りながら言った。

そのテレビ局の入口を出たところで、谷川さんは小声で、「ちょっとやってみて、」と言いながら左肩に提げた重そうなショルダーバッグを背負い直し、「内山さんと2人でこの番組やれるようになればいいな。」と下を向いて自分に話しかけるように言った。

家に帰って夕食をとった後、自分の部屋から高山のアパートに電話をかけてみたが、おそらくアルバイトでまた繋がらなかった。それから事務所から家に帰る時に決めたように、特に用事はなかったが事務所の仕事のことを話してみようと思って、内山さんの自宅に電話してみることにした。少し緊張しながら子機のプッシュホンを押すと、呼出し音が2回鳴った後、「もしもし。」と最初から内山さんの声がしたが、家族で声が似てることはよくあるので念の為、「W大学の石本と言いますが、内山さんいらっしゃいますでしょうか。」

と聞くと、やはり、「私よ。」と返事があった。勉強机に向かい右足を折り曲げて膝を台にして受話器を持ち、「石本です、お元気ですか？」と聞くと、「元気よ、石本君もね。」と言われた。

「今日も事務所行ってきました。今日、守口さんという人がいるテレビ局行きましたよ。」
僕がそう言うと内山さんはちょっと考えて、「あー、旅もののやつだ。」と気付いて、「それやるとね、デジタルビデオ持って1人で取材行くことになるよ。」と言った。

「えっ、1人でどこか行ったりするんですか？」

「あの番組は取材構成だけじゃなくて、デジタルビデオで映像のイメージまで事前に作ってあげることになってるの。そうやってロケを短くしてENG代節約してるんだって。今はリサーチ会社とのやりとりと現場の取材は、ほとんど谷川さんと私でやってる。」

「谷川さんは内山さんと僕とでやれるようになるといいな、みたいなこと言ってました。」

「石本君の仕事が気に入ってるんじゃないの？」

「仕事って言ったって翻訳だけですよ、ここ2週間の仕事は。」

「それがとりあえず大丈夫なんじゃないのかな。」

「仕事は気に入りました。小川さんもいい人だし、自分の勉強にもなるし。そう言えば内山さんはいつからオーストラリア行くんですしたっけ？」

「8月14日だからもう間もないわね、毎日英語勉強してるのよ、英会話学校で。」

「内山さんって国際部の講座ってとってないんですか？」

「とってないわよ、だって大変そうだもん。」

「ふうん。」と言って僕は煙草に火をつけた。1度吸ってから口をすぼめて煙を上に向かって吐き出してから、「ちなみに内山さんは英語はどれくらい喋れるんですか？」と聞いてみた。

「TOEFLで570点くらいかな？留学するにはちょっと足りないね。」

「大学受験生ってどれくらいとるんですか？」

「ヒヤリング次第だけど、得意な人はやっぱり670から80点とかなんじゃないかな。」受話器の向こう側でも、内山さんがいつも持ち歩いている100円ライターで、煙草に火をつける音がした。

「何の授業とるんですしたっけ、確か一度聞いたかもしれないけど。」

「普通の大学の講義とかはね、あっちも休みなのよ。冬休みだけどね。けど大学のウィンタースクールっていうか、希望者が集まって日本でいうところのゼミ合宿みたいなことをするらしいのね、そこにまぜてもらって、19、20世紀の国際政治やジャーナリズムの変遷についている調べたり、ディスカッションしたりするらしい。最低限の下調べもやっていかなきゃね。」

「けどなんでオーストラリアなんですか？」

「それは、ほら、TOEFLがイマイチだったから。」

「ふうん。」とまた僕が言うと、今度は内山さんの方から、「仕事うまく行ってそうでよかったね。」と僕の仕事の話をもた持ち出した。「安心して行ってきますよ。」と言って、ふふっと

短く笑った。僕が「秋の舞台のこと、あっちで仕上げるんですか？」と聞くと、
「もう粗筋はできてるんだけどね、ほら、いつか言ってた新聞記者の話。」と内山さんは答えた。

「石本君はパソコン持ってるんだっけ。」

「父親は持ってるんですけど、僕も自分のが早く欲しいんです。」

「コントは何か書いてる？」

「実はもういくつか出来てるんです。まだ誰にも見せてないんですけど。」

「じゃあ、石本君がパソコン買ったらメールで舞台の打ち合わせしようよ、私も1カ月日本語で何も書かないと勘が狂っちゃうかもしれないし。」

「あ、もうそれは是非。なんか嬉しいな、そういうことしてみたかったんです。」

「とりあえず石本君の力作が見たいな、今度よかったら送ってよ。」

僕はちょっと考えてから、「まだオーストラリア行くまでは少し間がありますよね？」と聞いて、そうね、と返事が返ってきてから、「一番最初に見せる時はメールの方が恥ずかしいから、会って渡してその場で感想聞きたいです。コントだからすぐ読めるし。」と言った。

「そんなものだけ、最初は。」

「僕、人に自分が書いたもの見せたことないんです、だいたい本当に書こうと思ったの最近のことだし。だから人に見せれるレベルか内山さんに聞いてみたいんです。」僕が汗を掻きながら思っていることを言ってしまうと、すぐに、「たぶん大丈夫よ。」と内山さんは僕に言った。

「私、石本君の書いたもの見たことあるもん。ほら、谷川さんそこに働きに行く話をしてた時、採用テストじゃないけど谷川さんから預かった何かの英文1ページくらい訳してもらったことあるじゃない、あれ。」

「だから大丈夫だと思う。」と内山さんは言ってくれた。

守口さんに届け物をしに来た旨を受付の女性に告げると、取り継いでくれてから10分後に、この前よりさらに疲れた顔をした守口さんが、20代後半に見える、背が低くて小太りの、小さな銀の丸眼鏡を鼻に乗せた男の人を連れてやって来た。2人とも体型は似ているが、守口さんの方が10センチくらい背が高い。守口さんは白地に水色の細いストライプを入れたジャケットをきちんと着ていて、隣の方は、ライターを首から提げ、赤と白、それに緑も少し使ったタータンチェックを模したようなチェックのコットンシャツを裾を出して着ている。天然パーマが緩くかかっていて、顔立ちは平板だ。

守口さんは、「わざわざ御苦勞様。ビデオテープと構成案だよな。」と僕に言った。

「いつもお世話になってます。谷川からお渡しするように言われたのがこちらです。」と僕は守口さんに紙袋を渡しながら答えた。それから守口さんが、「こっちが7月から僕と一緒にやっている長野です。」と隣の無表情なまま突っ立っている人を紹介してくれたので、僕は、「北岡音楽事務所の石本です。よろしくお願ひします。」と最低限の言葉で挨拶をしてから、相手の返事を待ってみた。長野さんは、「よろしくお願ひします。」とだけ僕のベルトあたりを見ながらぼそぼそと喋ると、守口さんに向かって、「じゃ、僕このまま編集戻ります。」と僕に挨拶した時よりははっきりと話し、守口さんが、「じゃ、よろしくな。」と言うと、そのまま投げ返すように、はい、と答えながらスタジオ通用口の方に向かって歩いていった。彼もひどく疲れているようだし、なんとなく今後めそうなタイプだな、と僕は思った。いずれにしても一緒に仕事をしてみればどんな人かはすぐに分かるだろう。

外に出ると陽射しは強烈で蒸し暑かったが、一人になれて気分は清々していた。雑居ビルの

クリーム色に塗ったコンクリート、通りに引かれた白い車線、そこそこに止めてある車のボンネット、道行く人々の着ている白地のシャツ、辺りのいたる場所で太陽の光が反射し、外を歩く人はみな眼を細めて歩き、高層ビルのオフィスで働く外国人達の多くはサングラスをかけていたが、緊張のとけた神経にはかえってこれくらいの陽射しと、おそらく30度は優に超えている暑さが心地よく感じられた。

地下鉄に乗って銀座まで出る間、さっき会ったばかりの長野さんの人となりについてぼんやりと想像した。僕の勝手な想像上の長野さんの生い立ちはどんどん悲惨なものになっていったが、途中から長野さんという具体的な人物は消えて、いつの間にか、誰とは分からない、酒乱の父親に打ち据えられる幼い子供のことを考えていた。

父親が子供の頭のとっぺんを、手首と掌の間の固くふくらんだ部分で殴る様、その拍子で台所のテーブルから落ちる薄手のガラス細工の灰皿と、落ちた時のくぐもった響き、いつもうろたえるだけの母親に仕舞われるように畳の部屋に入れられた後に、自分から押入に入り母を見捨て、暗闇の中で、東京六大学野球で活躍した父親が酒に溺れるようになった理由をじっと考えている子供と、なぜこの父親は酒乱になったのかエピソードを考えている自分自身が重なったところで車内のアナウンスが聞こえて我に返り、地下鉄を降りた。

体を冷やして気分転換しようと思って、デパートをブラブラすることに決め、改札を抜けると地下から三越に入り、ふと気付いて携帯をバイブレーションにしてからエスカレーターに乗って、スポーツ用品を扱うフロアでゴルフクラブとテニスシューズを見た。テニス用のウィンドブレーカーの袖を触っている時に携帯が震えて、階段の所について出てみると谷川さんで、「今大丈夫？」と僕に聞いてから、

「この前一緒に行った、赤坂の二宮さんの事務所知ってるよね、僕からあっちに電話しとくから、ちょっとピックアップしてきて欲しいんだ。」と言った。

二宮さんは現在、複数のクラブでのダンス・ミュージックの制作、女性タレントへの楽曲提供、バンドのアレンジ、プロデュースなどで主に生計を立てている。昔は自分でロックバンドをやっていたが失敗して、本人曰く、「ダンスミュージックまがいへの転身」が功を奏したらしい。うちの事務所と契約していて、日本での音源セールスにほとんど関心を寄せないニューヨークのクラブの代わりに、ベルリン、ロンドン、ストックホルムなどから持ち込まれるダンス・ミュージックの音源選定に携わってもらっている。

「二宮さんが気になるネタがあって現地のスタッフに調べてもらったら、ベルリンの音楽学校に通ってる15才の男の子がアルバイトで作ってたのよ。話してみたらパソコンですぐ音送ってくれて、二宮さんのいるクラブで常連に聴かせたら評判良かったらしくてさ。

それをお願いして500枚くらいMD作ってもらったんで、ピックアップしてきて欲しいんだ。よろしく。」

「何時に行けばいいですか？」

「飯もこれからだろ？2時半くらいって言っとくか。」

「分かりました。じゃ3時半くらいには戻りますので。」

「それからね、忘れてたかもしれないけど石本君、今日給料日だからね。」

言われるようにすっかり忘れていたが、意図的に少しだけ声を弾ませて、「あ、ありがとうございます。」とだけ言ってから、慌て気味に電話を切って、興奮を押さえながらエスカレーターでレストランのあるフロアまで上がった。分割でいいから絶対すぐパソコンを買おうと考えた。

その夜、いつか写真を見せてもらった高校の時の友達と、結局また北海道にバイク旅行に行っていた高山と久振りに電話で話した。北海道旅行は、東京の方に住んでいる旅行中の女の子を引つ

かけることを主な目的にしていたらしいが、高山はその点については、「大成功だった。」とのことで、僕は滅茶苦茶にうらやましがった。それで今度、高山の家で、その高山の友達と、北海道で知り合った女の子に僕もまぜてもらって晩飯を作って食べることになったが、30分話して電話を切る頃には、僕も中免を取ることをほとんど決心していた。

高山と電話している最中に父親が玄関を開ける音がしたのに気付いていて、自分の部屋からリビングに出てみるとやはり、ソファの脇にスーツの上着を置き、足を組んでペリエを飲みながら父親が座っていた。「ずいぶん早いですね。」と話しかけると、「仕事に飽きた。」と言って笑った。母親が洗面所から出てきて、僕に「不意打ちなのよ。」と言ったのを聞いて、父親は、「しょうがないだろ。」と答えた。さっき僕と夕食を食べ終えたばかりの母親がまた何かを作り始めた台所に行って、僕は自分用のグラスを持ってから、リビングの父親の右手に置かれた方のソファに座り、テーブルの上のペリエの瓶を取って自分で注いだ。「僕は働きはじめたばかりだから、まだ飽きてないし結構楽しいよ。」と父親に言ってみた。父親は、自分の父、つまり僕の祖父のコネで広告会社に入社したらしい。祖父と父親、あと親戚と父親との会話で、僕はなんとなくそう思っている。祖父は大手商社に勤めていたが、独立して食料輸入関連の代理店を始め、それが60年代に急成長を遂げて今では中堅商社となっている。

「それは素晴らしいな。」と言って、酒をほとんど飲めない父親はペリエをひと口飲んだ。リビングに置かれたテレビはNHKのニュースをやっている。

「お父さん、僕今度パソコン買おうと思うんだけどさ、」と僕が本題に入ろうとすると、父親は煙草をくわえて、右手を背後に伸ばし室内空気清浄機のスイッチを入れた。ブーンという低い静かな音を出す清浄機の方に、父親が最初に吐き出した煙が流れていくのを眺めながら、「僕が早く帰ってきた時に、パソコンのワープロだけ使わせてくれないかな、メールとかはウィルス呼んじゃうといけないからやらないからさ。」と聞いてみた。父親は、「そうか、大学のレポートはワープロじゃないといけないんだっけな。」と言ってから、「いくらのお買おうとしてるんだ？」と僕に聞いた。「30万くらいかな。」と僕が言うと、「じゃ、半分家から出そう。」と言ってくれた。心の奥では期待していたのかもしれないが、とりあえず内山さんにメールで送るために、今まで書いたコントをリライトしてフロッピーに入れられればいって思ってたので、資金援助の話はラッキーだった。

「じゃ、今からいいかな、早速だけど。」と聞くと、「いいよ。」と言われたので、空のフロッピーを仕舞ってある机の引き出しを聞いてから、グラスと冷蔵庫から出したペリエの瓶を持って父親の部屋に入り、明かりをつけ、パソコンを立ち上げた。

*

P「・・・球、速いな、見た目ちょっと恐そうだし、おっ、今なんか笑ってるぞ、調子よさそうだな、あのピッチャー。マウンドをこういじる勝手も、（自分も真似をして、かかとで地面をほじくる。）決まってるねー。これは、あれだなあ、俺次第では投手戦になるな。」

C「（Pと同じ方向、相手ベンチ近くで投球練習しているピッチャーの様子を眺めながら、）丸刈りに銀のネックレスがやけに似合ってるねー、彼。これが草野球だということを忘れないでいてくれてるといいんだけど。」

P「（向こうのピッチャーが投げたのを見て）やっぱ速いな。」

C「やってたね、しかもブランクないね。」

P「でかいね。」

C「草野球のレベルでは人を動揺させるでかさだね。」

P「コントロールはいいんだろうね。（球を投げたのを見て）全く問題ないね。うち相手に内角突かなくても充分だからね。分かっているのかな、向こうは。」

C「カンちゃんが全打席打てたらなー、さっき殺されそうになったし。」

P「スーパー勤めてなけりゃなー。ここからだと何時に出るんだろ。」

C「さっき1回打ったら出ちゃうって言った。」

P「カンちゃんは試合前の練習しにきてるんだもんね。お前最近打つ方はどうなんだっけ。」

C「この前は2本ヒット打ったけど、今日のピッチャーはレベルが違うからなー。こう、試合全体のムードを和気あいあいにするところから入らないとまず打てないね。」

P「回の間には、笑って何か話しかけながら、俺が直接ボールを渡してあげるとか。」

C「打席に入ったら、こっちから積極的に向こうのキャッチャーに話しかけるとかね。」

P「直接ピッチャーに話しかけるのは悪いからね。」

C「ピッチャーに対しては、せいぜい打席で構えた時に、やたらにここにこしてることぐらいだよな。」

P「それが全然気付かれなかったりしてね。まあ俺も体調はいいよ、昨日よく寝たから。あと10球くらい投げとくわ。」

（再び2人が投球練習するために離れる。PはCに向かって右手で、直球を投げる、という仕草をしてから、振りかぶって投げる。）

C「（Pのボールをアウトコース低めにビシッと受けてから、）負けてないじゃない。」

P「昨日は子供と一緒に10時には寝てたからな。」

C「（Pに向かってボールを投げ返しながら、）もう、いくつなんだっけ？」

P「（ボールを受け取って、）2才3カ月。目を離すと一番やばい時だね。けど女房はよく子供に寝かしつけられちゃってるけどね。（振りかぶりながら、）この前なんか、（ボールを投げる。）」

C「（またアウトコース低めにいいストレートが決まる。）いいねー。」

P「俺が帰ったら女房はソファで寝てて、（ボールが返ってくる。）子供はテーブルにちょこんと座ってじーっとテレビ見てたよ、女房が見てたドラマを。すごい集中力だったね。置物と化してたね。」

C「よくテーブル登ったねー。」（またPは振りかぶって投げる。投げ終わってから、）

P「俺がおもしろがってテーブル乗せたら喜んじゃってさ、高いところ好きみたいでね、癖になった。危ないんだよな。だから出来るだけ早く、もっと夢中になる安全な場所を考えないといけないんだよ。」

C「自分で降りれるの？」

P「そうだ、その訓練さえ完璧に出来てれば問題ないな。（ボールが返ってくると、カーブを投げるといふ風に右肘をまわして、）次これな。」

C「はいよ。（アウトコース低めにいいカーブが決まる。）いいじゃない、今日いいね。コジマとか今日は投げなくていいね。おっ、（Pに向かって『あっちを見てみる。』という風に客席の方に首を振って、）見てるよ、あっちのバッテリーが。」

PとCは共に、帽子を右手で掴みながらこやかに会釈する。

P「きっと『まあまあ』とか言われてるんだよな。年を重ねてだんだん人が何を言ってるのか、聞かなくても分かるようになってきたよ。」

C「いいじゃない、まあまあで。押さえりゃいいんだから。そうは点取られないと思うよ。向こうのバッティングにもよるけど。」

P「（また右肘をまわして、カーブを投げるといふ合図をCに送ってから）次もこれ。（と言いながら振りかぶって投げる。）」

C「（アウトコースにワンバウンドしたボールをなんなく掴んで）切れはいいよ。（ボールを返しながらか客席の方に目を遣って、）今日のうちのメンバーこんなもんだっけ？」

P「（ボールを受け取って）ちょっと待て9人いるか？1、2、3、・・・（と、指差しながら数え始める。）・・・8、9、10（このあたりで声が急に大きくなる。『じゅう』と言った後に指している方向を急に全く違う方向に振って、大きな声で、）じゅういち、じゅうに。」

C「あとお前の方で誰か来る人いる？」

P「一応、この前初めて来た武田君が来るとは言ってたけど。まだ来てないな。遅刻だな、これは。」

C「まだ若い人だっけ？」

P「研究所の方で契約している学生なんだよ。社内告知を見てメールが来たんだ。」

C「いろいろ努力してんな。」

P「いろいろやってないとチームがなくなるからな。（人指し指と中指で挟む格好を見せて）次これな。」（Pがボールを投げるが、これがワンバウンドして、Cはほとんど見送るようにして後ろにそらす。）

P「悪い。ちょっと引かかった。」

C「（Pに背を向けて、大きな声とジェスチャーで）オオター！ちょっと取ってくんない？そうそれ。悪い、悪い。（ボールが返ってくる。）サンキュー。（Pにボールを投げ返しながらか）あんまり審判にぶつけないよ、悪いから。」

P「本番じゃほとんど投げないよ、審判に嫌われるリスクもあるからな。（客席の方を見て何か気付いて、）おっ、うちのノックだ。（急に大声を出して）カンちゃん頼むわー！よろしくー。簡単でいいよー。」

C「（PとCが同じタイミングで一緒に、カンちゃんが高く打ち上げた内野フライを見上げて）いつもの内野フライからだな。」

P「相変わらず高く上がるね。舞って戻ってくるもん、打った方に。」

C「やっぱオオタ、フライ取るの危なっかしいな。早く構えすぎるんだよ。」

P「（急に大声で叫んで、）オオター！フライ取る時に帽子投げるのいいけどさー、そろそろ洗おうよ、それ。（客席に向かって叫んで、笑いながら、自分の帽子を右手で取って『オオター！』と叫んだ方に振り回す。）」

C「あれは癖だな、ノックの時からやってるからな。あれで何かのタイミングを取ってるとした

ら最初から帽子取ってたらフライ取れなくなるな。」

P「今度実験してみよう。」

守備の話かな、ノック見ながら。そこに車に乗った武田君が遅刻してやって来て、止めた車から飛び降りると、走りながらPとCに挨拶をしてそのまま通り過ぎ、ノックを受けるために守備についた瞬間にノックが終わって、終わりかな。武田君がノック終了の声を聞き、ガックリして大の字に倒れたのをPが見て、Cに「草野球界の助っ人ってジャージが目印だな。」と呟くのを最後のセリフにするか。

*

父親の部屋に入ってノートを見ながらワープロを打っていると、手書きの時に書いたものがどんどん不十分に見えてきて、幾つかのアイディアは残したがほとんど書き直すことにした。Cが痔を患っているのもネタとして安易なのでやめて、PとCの会話のネタが会社のことに偏りすぎないように変えた。吉田の話を思い出したり、スポーツ新聞の野球記者の気持ちを想像したりしながら書いていると、人が野球を好きになるということが少し分かるような気がした。

翌日事務所を夕方出ると、渋谷に行って小川さんから勧められたノートブックのパソコンを買った。電車の中で、パソコンの入った取っ手を付けたダンボールを膝の上に置きながら、メール送信のテストを兼ねて、書き直したコント（のようなもの）を、取り合えず途中経過だけでも内山さんに送ってみようと考えた。まだ日が残ってるうちに真っ直ぐ家に帰ってから、すぐに自分の部屋に入ってパソコンを電話線に繋ぎ、父親のパソコンを使って昨日のうちに加入していたメールサーバーに接続すると、インストールしてあるソフトが勝手に着信メールがあることを教えてくれた。僕のメールアドレスを知っているのは、谷川さんと小川さんと内山さんだけなので、おそらく谷川さんか小川さんが事務所から何か送ってテストしてくれたのかと思ってメールボックスを開けてみると、昨日送られてきた、オーストラリアからの内山さんのメールだった。

DEAR 石本君。

舞台に使う音楽だけ考えてみました。ちなみに、隣の部屋のオーストラリアの学生にもうけてました。

「HEAT WAVE」って知ってる？

「HEAT WAVE」というグループの、「Howling at the Moon」というアルバムに入っている曲を、石本君のコントが終わって、私の書いたものが始まるまでの間に流してみたいのです。

いいアルバムだと思うんだけど、曲が強いので、ちゃんとしたものを作らないと舞台の方がいらなくなってしまうと思います。

よかったら聴いてみて感想を教えてください。

どんな風に出したらいいか20分くらい考えてから、僕は内山さんに返事を書き始めた。